
今を生きるわたしを生きる私

高橋和絵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今を生きるわたしを生きる私

【Zコード】

Z8287E

【作者名】

高橋和絵

【あらすじ】

生きにくい現代社会を生き抜くため、情報化社会とか、バーチャル世代とか、しょっぱい友達とか、ワリと残酷な現実とかと戦いながらも、少女小梅はとりあえず生きてます。

ハルカワコウメ a (前書き)

小説更新に大変時間がかかってしまいました。

色々と諸事情がありLOGOS EX MACHINAがある種再編成した新作をお送りさせていただきます。

ろごまきを読み進めてくださった方々には申し訳ないですが、引き続きご愛読くだされば有りがたいです。

また今作からは一話の分量を短編読み切り程度の量としたため、作業量の関係上更新ペースが一定とはならないことをあらかじめご報告させていただきます。

また現状での有無は解りませんが、性描写、グロテスクな描写を含む話には前書き部分で警告を入れるようにしてみたいと思います。

誠に自分勝手に創作を進めており、お相手をして下さつての方々には大変申し訳ないとは思いますが、素人なりに出来る限り作品の質を上げられるよう努力いたしますので、どうかご容赦ください。

ハルカワカウメ a

みんなが生きる世界で。
あなたが生きる世界で。
私が生きる世界で。

こんなに豊かで、モノに囲まれ、光りに満ち溢れた世界。
苦しみも薄められ、悲しみも薄められ、都合良いく日々が流れてい
く、そんな毎日。

ソレなのに、私の胸の奥にはチクチクと何かが刺さったように、
どうしても消えない違和感が残る。

薄められた実感は、やがて私の存在すらも薄めてしまつようだ。
何だか不安で、足下がおぼつかないような、そんな感覚にとらわ
れてしまつ。

世界は、とても生きやすくなつた。

だけど生きやすくなつたハズのその世界で、どうしてこんなに息
が詰まり、先に進む感覚すら感じれずに毎日を過ぐなのだろう。

スカスカと死んでいくだけの毎日を、タダ横目で眺め。

私は歩かぬまま、動かぬままに年をとり、そして死んでいくのだ
らうか。

私は、そしてあなたはどうやって生きてい
るの生きやすく、生きにくく世界で。
どうやって。

それは中学校2年の私。

そのときの私はうだるようなアツいアツい夏の日ひびきから地
面を見下ろしていた。

場所は高くそびえる丘の上の集合団地、鉄製の非常階段の上から、遠く下に広がる地面を見ていたのだった。

地面には団地の駐車場が広がり、車の屋根が並び、その手前には花壇。

手入れのせいか花はマーバラで、残された花たちも真夏の日差しにあてられ茶色く萎びきつていた。

そして私は大きく息を吸い込んで、手摺りによりかかり、グッとその手に力を込める。

時間をかけてゆっくりと、一步踏み出し手摺りのパイプに脚をかけた。

カン、という金属を叩く音が、鈍く大きく広がり、それは私の中にも別の重さを持つてしみ通つてくる。

今日は、風が強い。

少し前に切つたばかりの髪を、暖かい夏のソレがすくい上げ、それと同時に心地よい清涼感がカラダを包み込む。

私は再び地面を見下ろし、そしてまた空を眺めて情けないため息をついた。

「はふ……今日は止めよ……うん」

力を緩め、踏み出した足を收めると、私はへなへなと床へ倒れ込んだ。

脚がふるえるのは高いから、汗が流れるのは怖いから。

不要な想像をしてしまい、どつと身体がアツくなつた気がした。

「何も、こんな気持ち良い日じゃなくても良いよね」

自分に言い聞かせながら私は街を見下ろす。

街の中でも比較的高台にそびえるこの団地からは、周囲の風景が一望でき、私の家を含めたこの土地のほとんどを見渡すことが出来た。

その中には私の学校や、通学路、流れる河川や、行きつけの本屋。友人の家や、昔通っていた幼稚園、かつての田畠、今では住宅街。そう言つた全てが見て取れて、あまり街から出ない私には、その

ほぼ全てが人生の足跡であり、人生そのものようである。

だからこそ、もし最後の瞬間を迎えるのならば、それはその全てが見える場所で迎えたいと思つたし、やつやつて場所を探していたら、私はこの団地へとたどり着いた。

少しの間その景色を眺めていた私も「よし」と、今日もこの風景にきびすを返す。

カツンカツンと足早に、赤ツ茶けた金属製の非常階段を駆け降りて、先ほどまで見下ろしていた、地面へとそつと足をつけた。自分が生きていることを確認するかのように、キツく握りしめた手を見つめ、ツメが手のひらを噛む感覚を確かめる。

そうして私は、今日もまた家へと帰つてゆく、何事もなく、まるで散歩でもしてきたかのように家へとたどり着くのだ。

「まーた飛べなかつたなあー」

夏の日差しに手を透かし、思いつき伸びをする。

空より降り立つた大地に風はなく、いつもの夏の熱気だけが漂つていた。

夏休みみて、スキだけどスキじゃない。

ソレはきっと私に限つたことではないと思つ。

長い休みは嬉しいのだけど、ござ何をするかといつのはまた別の話であつて。

ござ学校がなければ何も出来ない私は、一体何をどうすればいいのだろうと、そんなことばかり考えしまひ。

結局の所、空気は熱い照り返しと夏の湿氣でムシムシジメジメとしていて、こんなコトなら止めなければ良かつたと、今更ながらに口に出していた。

団地の立つ丘からはその景色へと続くアスファルトの道が続いている。

その景色の中に私の家もあり、わたしはトボトボとその道を下つていった。

道の周囲にはちょっとした雑木林が広がっていて、そこから伸びる日陰がアスファルトの上に私の道を作っている。

雑木林からはセミの声が届いてくるが、例年なら耳にこびりつくほどに鳴き叫ぶセミたちが、今年は少しだけ静かに聞こえる気がした。

耳障りなソレがないのはちょっと喜ばしいことでもあるし、それはまたちょっと寂しくもある。

あの声が聞こえることが夏の訪れであつたし、そしてゆっくりと減っていく事が秋が近づく印だった。

そうして私は坂を下り、図書館や工場のわきを足早にぬけ、降り注ぐ日差しから逃げるようにして影の道を駆け降りていく。車もなく、広い山道を独り占めするような気分は、なかなかにして気持ちの良いモノだ。

しばらく下つていくと途中、雑木林の中へと伸びる一本の細い階段がある。

コンクリートではなく石材で舗装されたそれは古い神社へと繋がる道で、私はよくソコを通っていた。

木々がトンネルのようになつたその道は、当然のようアスファルトのソレよりも涼しく、山道以上に滅多に人のいないソコは私のお気に入りだった。

その通りに階段を降りていくと、ソコには神社の境内の裏側に繋がっている。

そうしていつも通りに古びた青いベンチへと座り、いつも通りな大きなため息を、ダハアと一つもらすのだった。

「やつほう
」

と声。

振り返ったソコにいたのは、暑苦しい夏でもその野暮つたい髪を伸ばしたままの女の子。

同じく厚ぼったいフレームの眼鏡がどことなく知的な印象を与え

ていた。

「おお、まあじゃん、どしたのこんな所で？」

「いやね、図書館の帰りに見つけたからストーキングしてました」

「マジか？」

「まじで」「やる、で、そつちはナニ？　また団地に行つてたの？」

「ん、まあ、てか、別に良いじゃない、ねえ？」

と、私は友人のもつともな意見に口をとがらせた。

彼女も彼女でハイハイそうですか、と受け流し特別取り合つ氣もなさそうだ。

「大体そもそもナンでセー、意味解んないし」

「まあ、でつすよねー」

「またそんな適当な

「があうー」

「ほらほら、拗ねるな、グレるな、噛むなって」

「んー」

「まあ、アレだよな、迷つ時期で言つか、何かそういう感じなのかね」

「んー、そうナンですケドー、あー、いや、私セ……ドウしたら良
いんだろ?」

「だから、ソレを、あたしに聞いてドウする

また面倒な、彼女はそんな顔をしつつも青ベンチへと座り、私の話を聞こうとしてくれた。

「私さ、別に辛いことナンて何もないんだよ……家族も優しいしや、友達もいるし、家もあるしね、食べるモノだってあるし、お金だつて少しば持つてるし、足りないモノなんて無いのとか、ソレなのにナンでこんなにセ、ナンだと思う？」

「いらっしゃい、と言づかどないせよと」

どうして欲しい、そういうわけでもないつもりだし、どうにかなるとも思つてはいないのだらうが、ソレでもなんか口に出したいの

だつた。

「えーと、じゃ、慰めて！ お願ひ！」

「ほーれ、飛び込んでおいで」

なんて広げられた両手に私は飛び込んだ。

「だつてさ、ナンか申し訳ないじゃない、生きるだけでも必死な人間がこの世界には山のようによるのに、私はこんなにも恵まれて、こんなにも充実しているのに、ソレでもナンでこんなに足りないの？ なんださ、こんな私がのうのうと生きてるんだろう？ ナンでだと思う？ だつてさ、だつてだよ。知ってる？ 世界の何処かではその日の」飯も食べられないで死んでる子供が沢山いるんだよ？ 私より小ちな子が沢山死んでるのに。おかしいと思わない？ 何でこんなぐうたらで、頭が悪い私が生き延びてるの？」

「あー、とりあえずわ、顔を押しつけて喋らないで」

「あぐ、失礼……」

そうして彼女はぼりぼりと頭をかいて、びついたモノかと言つたように視線を泳がせ、そして少し唸つた。

「なー、ナンなら言つけども、なり言つけども、本当に四六時中、そんなこと考へてるの？」

「…………」

「自分の答えが出ないから、言つてしまえばソレも一種のハツ当たりじゃない、もやもやすんのを紛らわす方便でしょ、自分が憂いでいる気になつて、そんديい氣に漫つてゐる」

「…………うんー、かもね」

「だよ、もつと素直になりなつて」

「うーむ」

「ごもっともなんだけどね。

しかしながら「もつともつちやう」というのは面白くないモノ。

そんな時の対応というのは認めるにも行かず、否定するにも行かずで、宙に浮きがちな私。

勿論付き合いの長い彼女にしてみれば、私の考えなどお見通しな

のだらうけど、それでもソレを明瞭するよつないじめなく、はぐらかして相手をしてくれるのだった。

「まあ、気はないのが一番よ
「なによう……知つたふりしちゃつて
「突つかからない、私もスネねるよ?」
「あー、解つたよ、もう解つたから、もつ私を虐めなこでやつてくれ」

「自分から突つかつておいて何か」

「あーもーゴメンつて、だから、もう一回慰めて…」
「嫌、小梅べとべとだよ、汗くさい、てか臭い
「ちよーあー、そんなダイレクトに言いますか」
「言つや、言つとも、アンタももつ中学生なんだから、家でゲームばっかしてンのも良いけど少しは女の子っぽくなりなさいね
「説教は無しで」

「したくもなるわよ、いつ日々のすまうなアナタを見せられるとね
「まあ、ねえー……」

「……少しさ満足した?」

「うふふ、つテ感じ」

そして私はバツとベンチから立ち上がり、くつと背筋を引き伸ばしてちよつとだけ辺りをうつりこしてそして。

「んー、じゃ帰ろうかな

「あ、帰るの?」

「うん、まおちゃんはびつします? 一緒に帰る?」

「いや、いや、山田書店もよつてきたいし、山田薬局こむけよつとよらな」とイケナイから

「ん、一緒に行くよ?」

「いいの、アンタと一緒に本も選べませんて」

なんて酷い口トを言つ。

まあ、確かに私がいたらアーダ「アーダと喋つぱなしで結局本は

選べないのかも知れないけれど。

「ホンマ本好きやね、あんた」

「アンタも読みなよ、たのしいぜ」

「やや、あたしはまだ漫画専門で」

「勿体ない」

「なあ、あんただつてー」

「んふ、まあ、読むけどね」

そうして私は「じゃあね」とだけ告げて街の方へと伸びる下りの階段を降りていった。

彼女は何かを言いたげだつたけど、私はちょっと氣付かないフリをしておいた。

響くのは私の足音と、セリの声。

ソコにいるのは私だけ。

中学2年の夏の日々、私はとても充実して、とてもハツラツとして、そしてちよっぴり寂しかった。

とぼとぼと家にたどり着いた私のカラダを汗が一筋つたい、それは地面へこぼれることなく服にしみこみ見えなくなつた。さすがべたべたと言われただけのことはある。

私の家は木造の2階建て、決して真新しいと言うわけではなく、閑静な住宅地というよりかはモロに田舎臭が漂つている感じの懐かし物件。

それでも私はこの家がスキだとはつきり言つことができるのは、ソレはきっと私が父や母の「ト」がスキなのだから。

所々軋む床板も、色褪せた瓦や外壁の色も、全ては家族との思い出であり、そしてまた変えがたい家族の歴史。

きっと私は「レからも、この家からは離れられないんじやないかと、おぼろげながらも私はそう感じていた。

「あ、パパだ」

と道の反対側から一人の男性がやってくる。

本来ならまだ仕事中の時間だが、何時も重そうな鞄を持ち歩いて
いるその姿は遠目に見ても父だと解つた。

こんな暑い中でもピッカリとスーツに身を包んで、40代も近い
ハズだつたけどその顔は年齢よりか若く見える。

やせ形とはいかないまでも太つてるともいかない、そんな父の姿
は少しばかりではあるが、幼い私の理想の男性像を作り上げていた
ものだつた。

まあ、私は総合的に年上趣味であつて、ソレは年上趣味ではなく、
もしかしたらオヤジ趣味なのかも知れない。

「おー、梅か、どした、今日も散歩か?」

「うん、パパは? リストラ?」

「だはは、違う違う、えーとな、今日は仕事早く終わつたんだよ、
部長が折角だからお前らととハケちゃえつて、パパもようやく
明日から夏休みだ。まあ、一週間も無いんだけどね」

そう言つて父は茶田つ氣のある笑顔を浮かべ、ぽんぽんと私の頭
に手を置いた。そんでべたべただ、とか言った。

「いやあー……暑いな!」

「うん、暑いね」

「汗だくだな!」

「かもね」

「よーし、ソレじゃあパパと風呂でも入るか!」

「なー、やっぱりそう来たか……もう私中学生だよ? セクハラだ
よ?」

とげんなりとした表情でその要望へと答える。

すると父はもとより細長い目を更に細くして唸るのだった。

「んー、いやあパパも最近寂しくてな、小梅も中学入つた辺りから
すっかり相手してくれなくなっちゃつたしやー」

「そー言われましてもねえ、まあ、確かに、『無沙汰なコト多いけ
ど……』

「やあ、まあ、早くパパも子離れしないとダメナンだけどね、『メ

ンなあー本人に言つてもイヤミなだけだよなあ」「
と手をヒラヒラさせて苦笑いをした。

そんな顔をされてしまつと、どうにも居心地が悪いというか、間
が悪いとこ「うか、そんな感じで、私は少しむづとして、別に、とだ
け言つてさつさと家の中に引っ込んでしまつ。

そんなこんなでちょっとだけ寂しそうな父の顔を見ているのは、
ソレはソレでもやもやするのは今も昔も変わらないのだった。

結局私は、父が入つて『いる最中お風呂場に押し入つた。
父は急なことで皿を丸くしながら、慌てて大切なところを離れつ
とする。

一緒に入ろうなんて自分で言つておきながら、ござそつなると妙
に拳動不審なのは實に父らしい。

そんな姿は妙に私を安心させ、何だかふつとこひんな口トモをギリ
でも良い気持ちにさせてくれる。

「いやあ、でも小梅も大人っぽくなつたなあ」
「セクハラ親父め

「いや、ゴメンゴメン小梅は母さん似だからさ、アイツの子供の頃
つて小梅みたいだつたんじやないかーなんて思つたら、ちょっとな
んか懐かしくなつちゃつてわ」

「母さんかあ……」

「うん、あれもあんまだからね、写真も何もあんまり見せてくれな
かつたんだよ。僕はまあ、嫌がるのは強制したくないし、まあ触れ
ないでコトも無しつてなら出来る限り昔のことには触れないようにな
はしてたんだけどね」

そう言いながら、父は狭い浴槽で手を組みグツと身体を伸ばした。
「あー、いや、でもねえ、母さん今ではぶよーんでびよーんだけど、
昔は結構バインでボインだつたんだよ?」

「うつそ……ホント?」

「いや、ホントのホント」

「なら私も……？」

「いや、その血は流れてないと思つ」

なんてガツクリ。

ソレは確かにそう言つタイプの人間ではないカモだけど、と言つ
かどちらかといふと幼児体型かも知れないけれど、そう父親にまで
ハツキリ言われては傷つくというモンだ。

腹いせに風呂桶で湯船のお湯をすくい上げ、父へとぶっかける。
そしてキャッキャと笑いながら、父にお湯をかけられるのだった。
「ああ、そうだ夏休みはどうなの？ 予定とかは、宿題とかさ、ま
おちゃんとかとは遊んでないの？」

と言つのは私が好きではない話題。

そんなことでついつい顔を逸らし、そしてまた、別に？ と小さ
くこぼした。

父の顔は、ちょっと寂しそうで、ちょっと不安そうで、じちりを
覗くようにながらも「そうかー」と言つだけでそれ以上聞こいつと
はしない。

私だつて別に、宿題が終わらないとか、予定がないとか、そう言
つたことを隠したいのではない。

それはそう、面白みのある日常が無く、毎日が同じよつに過ぎて
いくソレを喜び勇んで話すよつな、そう言つた気持ちは私にはなか
つたとそう言つことビダケ。

それでもソレを直接口に出せない私は、どうしてか父を傷つけて
しまっていたのだろうか。

「パパは？」

「ん？」

「何か予定はあるの？」

「あはは、あーあんまりかなあ……明日職場の同僚とお酒飲みに行
くケドね……ほら、だからさ、小梅に予定がなかつたらさ……何処
か行こうか、なー、とか、やつ？」

なんて父も、じぢらを見ることが出来ないままに、ひょつといづれ

らの様子をうかがいながら、先ほど言えなかつた言葉を紡いでいくのだった。

距離をうかがい、娘の様子をうかがいながら、父はいらぬ気を使い、私の機嫌を取つてゐる。

「んー、考えとくね」

当時の私は残酷で、残酷な子供であつて、父はその言葉で、自分の休暇は特に家族ふれ合いもないまま終わることを悟つたのだろうし。

そうして私は何事も考へることなく、父の優しさも忘れてこき、そうして夏休みを終えていくのだろう。

本当に、私は残酷だった。

ソレがどれほどのことなのか、『氣づく』とすらできない。本当に軽い気持ちで、私は父を傷つけていた。

「ねえ、パパ……」

「ん……？」

「もしさ、私がさ」

「何？」

「んー、死にたいって言つたらどう應ひ？」「

目を丸くした父はふうと、小さくため息をつき。

何かを考えるように天井を見上げ、そしてこう答えた。

「あー、そうか、ん

「……」

「理由かな、なんでだつ！　て聞いたりとか、そうするかな……」

そう言つた父の顔は、決して怒つてはいないのだが、それでも直視するには辛いモノだつた。

「なんでつて、なんで……？」

「だつてなア、自分の大切な娘がイキナリ死にたいなんて言い出すんだ、何があつたか気になるし、ナンでそうなつたのか聞きたい、もしかしたらパパが力になれるかも知れない、だからかな、そんな

難しい」と急に言われてもパパだって困っちゃうなあ「

「パパ……」

「どーしゃったんだよ、小梅なんか変だぞ」

と言ひてちよつと引きつった笑みで私を撫でてくれる。

残酷な沈黙が、私と父の距離を少しずつ少しずつ遠ざけていくような感じがした。

ソレは次第に溝を広げ、暖かいはずのお風呂も何だか少し寒々と感じる。

おかしいな、こんな結果は求めてなかつたハズ。なら、私の望んでいた結果つて何なのだろう。

「だわああはツツ！」

突然父が奇声を上げながら湯船から立ち上がる。ぽかんとしている私を半ば無視して、盛大に盛大に雄叫びを上げた。

「があああダメだ！」の話は良くない、暗い！ 父の権限で即刻中止する

「ナニソレ！？ え、何、急に！？」

そうして父は私の頭へと手を置いて、そうしてゆつくりと、今にも泣き出しそうな私を撫でてくれた。

「まあ、そんなに気にしないで良いから

「だつて……」

「いや、小梅ももうそんなことを考えるようになつたんだなあって、気付かぬうちに大きくなつたんだなあって、ちょっと思つちやつた」

不思議な顔をしている私に、父は続けた。

「パパだって、そういうことは考えたことがある、何かもやもして、ワケわかなくなつて、時には何か死にたくなつたりして、将来的な心配とか目標のない不安感とか、ダレだって感じることだし

ね

「そうなの？」

「うん、まあ、そうだね……ただ、まあ高校生になつたあたりだけどね」

「そう、なんだ」

「んー僕がまだ小梅ぐらいの頃は、その、なんて言つかもつと子どもっぽかつたと思うよ、小梅はまだ中学生なんだから、中学生なりで、それなりで良いんだよ、そんなこと考えるには早すぎる」

「そりかな」

「そうだと思う、子どもはもつと遊んでやる、楽しんで、ソレが仕事だよ。子どもが死を選ばなきゃいけないような問題なんてあつちやいけない」

その時の私はどういつた顔をしていただろう。

驚いた顔をしていたかもしれない。

勿論父の子供の頃なんて知らないし、ソレを話す父だって知らなかつた。

それどころか、これ程に饒舌な父を見ることすら稀なことだったのかも知れない。

「いやあ、パパも上手くは言えないんだけどサア、小梅達はパパとは違う世代に産まれてるからね、パパとかとは違つた考え方をしちやうのかなつてさ。もしもそなならソレはきっとそんな時代を作っちゃつたパパ達に責任があるのかも知れないって」

そう思うのだ、と父は自嘲気味に微笑み、頭をワシリワシとかいた。父が嫌がることは嫌、そんな発想だった私は、パパは悪くないよ、と思わず声を大にする。

とても嬉しそうに「そつかそつか」と言う父は、いつも通りの笑顔を浮かべていて、思わず私も少し嬉しくなつていた。

正直に言つてしまえば、当時の私は半分も父が言いたいことを理解していなかつたと思う。

今になつて考えれば、もう少ししゃべりと父の話を聞くべきだつ

たと思うけど、考える力も無い上に、考える時間すらも失いつつある幼い私たちはソレは難しいことだつたのかも知れない。

次々と溢れるモノ、価値に、情報に押しつぶされ、飽きることを強制され、新しいモノを強制された私たちの世代。

あまりに多様化した価値観は、ゆつくりと私たちに忍びより、自分たちの存在の価値観すらも酷く稀薄なモノに感じさせてしまう。選びきれない価値という強い光りに照らされて、外界より自分の価値を見出すことの出来なくなつたコドモたちは、ソコに価値を求めて自分という世界をゆつくりと掘り進んでいく。

だけどそう、そんな幼い私たちは自分を掘り進んでいつてもたどり着くところ何て用意されているわけが無く、そうした私達がたどり着いたのは、一種の絶望であり、一種の虚無であつた。

何もない、何者でもない自分は、無知故に来る世間への不安、無知故に待ち受ける将来への不安、そして無知故に苦しむ今への不安に耐えきることが出来ずに、そうしてゆつくりとこぼれ落ちていく。知らないのに、知つているようになれるから、子供なのに、大人みたいに振る舞えるから、辛いのに、辛くないみたいに見せられるから、コドモたちは、そして幼い私たちは、そんなにも解らない自分に苦しんで、そうして日々、死にたいと口ずさんでいた。

そうだね、子どもはもつと単純で良いのだと、私たちは知らなかつただけなのかも知れない。

そうして私は父と日々に長い話をした。

日常から掘り出したほんの取るに足らないことであつても、ソレを楽しそうに話すだけでパパは大げさなリアクションで喜んでくれる。

私もソレにつられて笑い、日々のぼせるまで一人で日々のお風呂を楽しんだ。

今思えばその後父とお風呂にはいるなんてコトは、一度もなかつたのかも知れない。

私が忘れてしまつてはいるだけかも知れないけど、そんな中であつて、この日の記憶だけはしっかりと私の中に残つてはいるのだった。

小さな庭に面した小さな縁側で、私はアイスを頬張る。

やはり今年は、セミ達の声が小さい。

例年は家の中についても、夕暮れに響くセミたちの声が、じーじーじーじーと届いてくるのに、今年はどうだろう、耳を澄ませば聞こえてくるような、そんなか細いモノでしかなかつた。

「うーめー、パパもアイスもらつて良い？」

と、台所の方から父の声がした。

「いいよ、但しカップのヤツ食べたら私もパパとはいえど容赦はないから」

「解った、肝に銘じておく」

としばらくすると、ソーダ味の水色アイスを持った父が、のそのそと縁側にやつてきた。

「この縁側は一人でいると本当に狭い。

「パパがアイスなんて珍しいね」

「そう？」

「ん、パパアイス食べると腹冷やすつて、いつもあまり食べ無いじゃない？」

「ああ、かもなあ、まあ、たまには良じじゃない」

「うん、どぞどぞ」

と、カラダをズラし狭い縁側に父の座るスペースを作つた。

父は「それでは失礼して」と、ビックリショナンて言いながら座り込んで、そのアイス棒にしゃくと口を付けた。

「なあ、小梅……」

「何？」

「あ……いや、さっきのこと、ママが聞いたらどんな顔するかと思つてね」

「殴られると思つ

「だはは、確かに、怒られるよなあ。まあ、さ、パパもできれば聞きたくなかつたけど、まあ、聞けたから解つたこともあつたからね、一概にはどうコウ言へないけど」

「うん……」

「だけど……」

「うん?」

「頼むからさあ、パパより先には死なないでくれよ」

なんて、多少呆れるような声のニコアンスで、父は言つた。
真つ直ぐすぎる自分のメッセージが恥ずかしかつたのかも知れない。

ひつりには顔を向けず、いつも通りのちよつと疲れたような、ちよとおちやらけた様な調子で、固く強く、そう言つた。

「うん、じめんなさい…………ねえ、パパ」

「ん?」

「抱き付いて良い?」

「お、パパは何時だつて大歓迎だ」

なんて言つので、私はぎゅっと父へとしがみついた。
お風呂上がりではあつたけど、忘れかけていた父の匂いが、私の中にそつと広がる。

申し訳ない、あの気持ちは何年経つても変わることはない、ソレは今になつても同じ口。

どれくらい時間がたつたか、手に持つたままのアイスが少しずつ溶けはじめ、ソレが指にひやりと触れたとき、私は残っていたアイスを一気に頬張つた。

「おつおつ、お熱いデスなあ

「ん……」

ヤツはいつの間にか家の中に座り込み、そつして私の背中を見つめている。

私は慌てて父から離れ、縁側に寝そべるように仰向けになつて家

の中を、彼女の事を睨み付けた。

「だつ！ バカまあつ、勝手に人の家に入るなって言つてゐるじゃない」

「やあ、まあちゃん」「んばんは」「どうも、こんばんはオジサン」

なんて私を無視して挨拶するなよと、私は悪態をついていた。

「何時からみてたん？」

「ワリと最初の方から、あーあれや、今からさ、夕田見に行かない？」

「夕田？」

「そう、夕田」

「なんですか？」

「うん、前に何かの本で読んだ、人間は寂しくなつたら夕田を見に行くんだつて」

「そか……」

私の手には蚊がとまっていた。

気付いた頃にはソイツは既に飛び立ち、後には不快な痒さだけが残つている。

私はまあの顔を窺いながら小さくため息をついた。
まあのヤツは私よりも解りやすく出来ている。

「あー、じゃあ行く？」

「おお行こう、オジサン、小梅借りてきますね」

「ああ、ちゃんと返してね」

「もちです」

「そいじゃ行つてくれるね、パパ」

「おー、気をつけろよ」

「うん、決着つけてくる」

「ほお」

「ナニ、決着つて？」

「すぐに解るよ、たゞ、行きましょ行きましょ」

夕暮れの空は少し涼しくて、ゆっくりと傾いていく夕日を横田に見つづ私達は丘の上へと走つていった。

山道を登り、いつもの神社を通り抜けて、そうして階段を駆け上がる。

工場を過ぎ、図書館を通り越して再び丘の上の団地へと駆け上がる。

カンカンカン。カンカンカン。

固い金属を踏みしめて、ひとつそりと高鳴る鼓動を押し込めて、私は空へ空へと上つていく。

はじめは雑木林だつた遠い風景が、徐々に上るに連れてあの街並みへと変わっていき、空高くに浮かんでいる赤い赤い光りと熱の塊が、今では街の真上に降りきていた。

真つ赤な真つ赤な夏の夕暮れが、メラメラと、広がる全てを赤く染め上げて。

私もその赤い顔で、赤い瞳で、その赤い世界を見つめる。熱く切ないソノ風景は、どうしても美しくて、どうしても優しくて、そしてどうしてもかけがえのない大切なモノ。

この世界を見つめる今の私、この私だけは誰にも譲ることの出来ない私。

今を生きる私。

「ああ、どうしようか?」

まおは私に問う。

「どうしてどう? アンタが来ようつて言つたンじやん」

「まあ、そうなんだけどね、けつこー綺麗じやん?」

「んー……」

「ここか、あんたの自殺スポットだよね」

「うん、そうだけど。まあ、別にドウもしないよ、私は夕焼けを見に来ただけ、それだけ」

そうして私は真っ赤な笑顔で振り返り、あけらかんとした表情でそう言った。

「それに、やっぱ私は解らないもん、確かにキビシくって辛くて、モウイヤダつて思う事なんて山のようにあるけど、ソレでも死ぬのはホントの最後の選択肢だし、だから死ぬなんて解らない、多分私は死にたくない、『コロから死にたいなんて、思つてない』

「そりなんだ……」

「うん、何かね、死なないでー！ 言つてほしいだけなのかもしない、そもそもしないと自分が必要とされてるか解らないみたい」

「あはは、その気持ちは分かるなあ」

「死のうとしてたら誰か止めてくれるかなつて、助けてくれるかなつて思うンだけどさ、結局誰も気付かないし、気付いても助けてくれるかなんて解らないしねえ」

「バカだよね」

「うん、バカだと思う、一種自分の中での整理みたいに考えてたのかもしれない」

「オジサンの」ともその程度で考えてたの？」

「そうでもないと思う、いや、別にそんなつもりはないよ、ただパパは優しいから、優しいからついで、ついつい甘えちゃう」

「まあ、良いけどさ」

「解つてる、汚いヤシドリゼーますよ私は」

「なんだよ」

「私はさぞんなことを言えばパパが心配してくれるか、どういうコトをすればパパは私を気にかけてくれる解つてやっててるから。私はお姉ちゃんがいたからかもだけど、スッゴクそう言ひ口ア氣にしながら生きてきたから、どうやつてヒトに氣を使わせるか、ヒトに意識させるか、打算的で、ずるいけど、そうやつて私は生きてきたんだもん。死にたいと思う気持ちも、ソレに対応する周囲の気持ちも、そう言ひの全部自分を保つために利用しているんだもん」

「そつか……で、どうだつた？」

「パパ？」

「ん」

すると私はちょっとばつが悪そうに頭をかい、そうしてその顔を見せないようにそっぽを向いて街を見下ろした。

「まあ、世の中思うようにはいかないね」

「ふん、バカめ、てか飛び級のバカだね、てか飛んでしまえ」「あんまバカバカ言うなあ、てか飛べとか言つか普通、まあバカだけど」

「まあまあ」

「んー、まあー予想外だったね、そもそも予想すらあんまり立ててなかつたのかもしれないけど、正直大人ナめてました、親ナめてました。スマセン」

「私に謝つてドウするよ、私知らないから
「だね」

ゆつくりと夕日は沈んでいつて、真っ赤だった世界は徐々に闇の気配を帯びていく、高い空はやがて黒く、青くなり始め、そして太陽は着実にビルの間へと姿を潜めていく。

「まあは、ナンでここに来たの？」

「んふー、それは、寂しいときは夕日を見るからで、一人で見るよりも、一人で見る方が寂しくないと思つて」

「それでどう?」

「分かんない、もつと寂しいかも知れない」

「ナンで……?」

「分かんない」

彼女は何時も自分から私へ話しかけてきた。

それは、私は自分から人に話しかけるようなことが無いし、それでは彼女は寂しいから。

だから彼女は執拗に私に絡みついてきた。

「うがー」

「何? 小梅?」

「だつたら言うよ、決着つけるよ、もつ止めようよ、自殺未遂なんて、私ヤだよアンタが死ぬのなんて」

大きな沈黙が流れ、夕日は街に没した。

彼女の顔は悲しげで、そして少し焦っていた。

それは一年前の夏の日。

彼女はこの非常階段から実際に飛び降りたのだった。

その時は幸い、木と、ソノしたにあつた花壇のおかげで一命は取り留めたが、それは当時から親しかつた私にとつても世界をひっくり返すような出来事だった。

彼女は両親の問いかけには何も答えなかつたが、私の問いかけには答えてくれた。

何かが嫌だつたンじやない、全てが嫌だつた。

誰かが悪いんじやない、自分が悪いんだ。

私は小梅のようには振る舞えない、私は、私を生きるしかないのに。

「ゴメン、今日はダイジョブ、ただ、ちょっと母さんと喧嘩しちゃつて、あんまり考え込むとイケナイから、だから、ほら、小梅に慰めてもらおうと思って」

「……」

「仕方ないじやん……私は、私はそう言つ生き方しかできないから、私だつてさ、アンタと同じような事を考えるし、アンタと同じ事で苦しんでるんだから。だけどさ、私はアンタとは正反対だし、アンタのようには生きられない、誰もが自分みみたいにナンでも脳天気に過ぎせるなんて考へないで」

そうして彼女はこっちを向いて、そして肩をわしと掴んだ。

「私は、そうだよ、真似事じやないッ、アンタとは違つて、死にたいよ！ 死んで、もし樂になるなら死にたいよ…………」

「そう、だから決着つけようよ」

「……？」

「本当に辛いなら、アンタと一緒に死んであげるから」

彼女は驚いただろ。事実顔は驚いていた。

そう思いながらも私は手摺りをまたぎ、高い高いアパートの非常階段、その外側に掴まる。

手を離すだけで私の身体は遠く下の地面へと落下して、ぐしゃりと、まるでトマトのように潰れてしまうだろ。

慌てる彼女をよそに、私は体の向きを変え、階段に背中を向けて後ろ手に体勢を立て直す。

まるで十字架にかけられたキリストみたいに、両手を伸ばし、脚をそろえて、私は叫んだ。

「ほーらっ！ 一緒に飛ぼうよー。コロで全て解決！ 寂しくもない、楽にもなる、みんなコロで解決！」

「ナンでッ、ンなコトするのー。あんたがソンなコトしても、ナンにも意味無いじゃない！」

「意味ならあるよ、私たちは運命共同体だもん。こんな世の中をお互い手を取り合って生きていける数少ない仲間だから。だから私は自分の命かけてでも一緒にいれる友達が欲しいんだ。どんな人間も、同情はしても一緒に死んではくれないつて……だから私は一緒に死んであげる、アンタに、その氣があるなら、いくらでも一緒に死んであげるから！ だからッ！！ だからツアーーー！」

風が強い。

私の身体は強く揺さぶられ、私も瞳に涙を浮かべ、ふるえる脚に力を込めて、そしてまたソレを彼女に悟られないように、笑つていうとした。

そして彼女は私に抱き付くよつに、腕を回して私を押さえ付けた。手を回した瞬間に、私の口からは「ゴメン」という言葉が漏れ、彼女は思いつきりの力で私を抱き留めた。

「ばか、死ねよ、ソレじゃ、死ねないじやん私」

「あ……あは、は、なは、ゴメンね、こんなやり方で、それでもアンタは優しいから……私は、アンタに頼っちゃう。ゴメンね、こん

な私で

「いいよ、いいって、もういいから」

「うん」

「ねえ……知つてる？ 私たちは……生き続ければ大人になっちゃうんだ、そんでもって大人になつたら誰も私たちのコトなんて心配してくれないんだ。死にたいと言つても周りから帰つてくるのは、じゃあ死ねばつて。だから。私も一緒にいてあげるから、もしアナタが死にたくなつても、私が何時でもいてあげるから、もし死ぬときは一緒に死んであげるから」

「……あんがと」

「どういたまして」

「ゴメンね、また利用して」

「もう慣れました」

「んふ」

「……ありがとね」

「あーはは、怖かた……怖かつたー」

「私たちは非常階段の上で、日が落ち、灯りが浮かぶ街を眺めていた。

そうして何がおかしいのだろうか、笑いが止まらなかつた。

「はあ、ねえ」

「何？」

「約束」

「ほう？」

「また見に来よう？」

「この先も生き残れたらな」

「そのつもりで」

ひとしきり息を吸い込んで、そしてひと思いにはなき出した。

「じゃあー私は、死にません！」

繰り返し、繰り返し、彼女はこの風景に叫び続ける。

絶対絶対生きてやるから。

まるでこの空と約束でもするかのように、彼女は喉がかかるまで叫び、そして伝えた。

どんなに苦しくても、どんなに辛くても、だけど絶対死がないから。

生きて、そしてまた見に来るから。

だから、一つだけ約束して欲しい。

お願ひだから、私のことも見守つていってください。
タスケテなんて言わないから、忘れないで見ていてください。

いざれ社会は私のコトなんて気にもとめなくなる。

そんなときは、私はこの思い出を抱きしめて、生きて行けたい
いな、なんて。

そんな甘くて、しおっぱい幻想を抱いて、私はこの日を決して忘
れない。

今を生きる私。
ソレを生きる私。

ハルカワコウメ b

私が高校生になつたとき、ソレは全世界へと広まつた。

何時でも何処でも誰にでもの謳い文句の下、コビキタスネットワークはついに人々の身体にも忍びより、人類は本当の意味での場所を選ばぬネットワーク接続を可能とした。

世界の距離は大きく縮まり、田舎の商店街に居ながらに高級デパートでの買い物が可能となり、学校に居ながらに、コドモたちの脳はゲームセンターへと繋がつてゐる。

ある意味で夢のような社会、文字通りの夢のような社会。

当然裏には山のような問題を抱え、解決できぬままに広がつた文明の利器は、まるで急速な経済発展の代償とした公害問題の如く、各地にその爪痕を残していく。

イツでも、ドコでもは解決されながらも、ダレにでもは何時の時代だつて解決されない。

情報格差は社会的な問題にまで発展し、イツでもドコでもの知識のライブラリへと開かれた階層と、古めかしく重い紙のライブラリに押し込められた階級とで世界は一分された。

学校にしたつてそう、バカと罵られる子は大抵低所得者の子であり。

テストすらも今まで通りにはとり行えず、経済力が子供の成績に直結しないよう、先生達は金属探知器を導入するなど、周囲からは滑稽にすらうつる努力を繰り返すのだった。

知らないのに知つた気になる、そんな人間で世界は埋まり、世界は無知な知識人で埋め尽くされた。

そして次第に知るという行為すら稀薄になつていく、理解するといふ事自体が無意味になつていく。

だつてそう、全ての人は即座に全ての知識に繋がっているのだ。
私の知つていることなんて、大抵の人も知つていて。

あの人も知つていることも、大抵私は知つていて。

そうして個は更に薄められ、情報という海の中、人類はある種の
一つの生命へと成り代わろうとしていた。

「でー、まおちゃんはよ?」

学ランに身を包んだ男、本城はそう私に尋ね、かつたるそつに肩
を大きく回した。

「塾だつて」

「塾だつて?」

「うん、そう言つてた」

「塾だつて、てか」

「うん、いや、違つ、そうじやなくて、てか夏期講習だけど」

「いや、解つてるけど、そか夏期講習ね」

そうして彼は再びかつたるそつに肩を回す。

「じゃあ今日は俺達一人だけか」

「そうだね」

「や、ホントに、俺での部屋で良いのか?」

「ナニ赤くなつてんの」

「赤くなつてなんていませんで、と言つかお前も女子ならそういう
トコロ遠慮しようよ」

と、彼はばつが悪そうに肩を回した。

スポーツ刈りだし、不良っぽいし、若干強面なこの男だが、そう
言つた点では結構かわいげもあつたりする。

「そう言えばさ、5組の知つてる? 山田つて」

「あー、うんー、自殺したンだけ」

「ん、ソレの理由聞いたんだけど……知つてる?」

「知らない」

「それがさア、聞いたトコロによると携帯ハードディスクをウイル

スでやられちまつたことが原因だそうで

「うえ、なに、たつたそれだけで?」

「そーらしーよ」

「ナンでまた」

「んーなんでも大抵のことは自分で覚えないでそん中に詰め込んでたらしいからさ、言ってみれば頭の中を全部持つてかれちゃった感じで、スッゴイ喪失感が、スッゴイ空白になつて、最終的には自分が何だか解らなくなつちゃつたんださ」

なんて、言われてみれば確かに怖い話だ。

自殺した彼女は言つてみればハードディスクといつ記憶媒体に自分を委託していた。

機械に思い出を預けて、そうして自分はナニをしていたんだろう? 「バックアップとか、とつてなかつたの?」

「とつてたらしいケドな、とつてたつてその事もウイルスで飛んじやつたんじゃないの?」

「いえー

「いえーなー

そうして私達は山道を登つていいく。

彼の家はある団地よりも更に丘を登つた先、携帯圏外のギリギリの地点にある。

涼しい山の風が辺りを漂うソコは、私たちにしてみれば身近な避暑地のようであり、知り合つた頃から暇さえ有れば、そしてことさら夏場は彼の家に入り浸るコトが多くつた。ちなみにまあがいなことは珍しい。

まあ、私たちだってそろそろ遊んでいるダケではいけないのだけど、都心の大学へ行つた姉でさえ3年生になるまでは遊んでいたんだ。

それと比べればまだまだ大丈夫と、何処か安心しきつている自分が不安になつたりもしなくもなかつた。

「そう言えばさ

「何?」

「セミ、鳴いてないね」

「まだ、早いだろ」

「そつか

「そうだと思つ……そう思いたいな」

「だね、そう思いたいね」

そんな思いとは裏腹に、山道は完全に静まり返り、木々のさえずる
ような擦れだけが響き渡つていた。

「おじやましーます

「じゃましまーす」

正直私の家より都会チックで、まさこ家！ と言つた感じの風貌
の彼の家。

建ててからもあまり経つていなかっためか、その白い外壁は山の上
の風景からは少し浮いて見えた。

まあ、行つたつて私らは大抵ゲームしかやってないのでビ。
おやつも出てくるソイツの家は絶対あたしんちよりかは居心地が
良かつた。

「何やる?」

「ナニやろつか?」

私は彼の部屋にはいると何食わぬ顔で冷房をつけ、人の家である
ことも構わず「うつと床に寝そべる。

高校生の男子の部屋としては片付いてる方だと思つし、何かと見
た目によらず几帳面なこの男らしい部屋。

すっかり我が物顔な私は、もはや部屋の何処に何がある今まで把
握しつつあつた。

「なあ、小梅のコソタクトつて・チャンネル対応してる?」

「何で?」

「なんでも

「まあ、うん、確かしてたと思つけど」「んならよし、うん、まあ、実はもとよりやるモノは決めてたのだけどね」

「と、言つと?」「

「実は「コレ、ほい」

「何のディスク? と、手袋?」「

「うん、3Dネットワークサービスの」

なんてワケでネットワーク技術の進歩は人類に仮想現実の体感すらも提供できるようになつていていた。

一昔前はSFの世界だけで繰り広げられていた手の届かぬ人工の夢は、金さえ払えれば手のひらに乗るゲームのコンテンツの一つとなつていて。

「ふあ! もう、マジですかッ、あれ、噂のつ? 手に入らない! ?」

「そう噂の」

「あたしもやつて良いの?」

「勿論そのつもり」

「ありがとう、青狸! !」

そうして私は彼のジョリジョリのスポーツ刈りをなで回した。

真っ白なネットワーククロバーに、私の口は沸き立つていた。今までの人生で一度も見たことがない程の圧倒的な白い世界。それは人の手でないと作り出せない無垢な白さ。無意味な白さ。だからだろうか、今までにないほどの“来たことがない感”を刺激され、私はむちゃくちゃにハイテンションだつた。

仮想現実とまで言つたから、私はてっきり全ての感覚がゲームの中に移るモノと思っていたのだけど、実際のところは視覚的なモノがメインのよう。

触覚等はもちろんのこと、視覚なども現実と共有しているため、

「一つの身体を同時に操るようなそんな不思議な感覚がある。

『言つてみれば起きたままに夢を見ているカンジ。』

初めは『ゴチャゴチャするかと思つて氣にしていたけれど、集中してしまえば残る感覚の方はあまり気にならないようだつた。

「よう、来たか坊主！ お、アバター結構似てるじゃん」

「テンションたけーよ、少し落ち着け」

「うへへ」

何時の間にかソコにいた本城っぽい顔の男性が肩を回しながらやつてくる、落ち着いてるよう見えるけど、それでもワクワクしているのは感じ取れた。

「そいえばいいの？ IDとか作っちゃって、『』ってアンタの家族のヤツでしょ？」

「ん、いいッぽいよ。IDは無料でいくらでも作れるみたいだし、お前も手に入つたらそのIDで引き続き使えば良いンじやん？」

「あ、そなんだ、ならお言葉に甘えて」

「お~、甘えとけ」

「んお

「ん？」

「……で、あれさ、私は？」

「なにが？」

「似てる、顔？」

「うん、美人過ぎだな」

とかまた傷つくことを言つてくれる。

そりや確かに多少背伸びしたかとは思つたけど、背伸びつて言つた身長とか胸とかも少々水増ししたけど。

そりやゲームだもん、ちょっとばかり夢見ても良いじゃないの、と彼の背中をどついた。

彼も彼で悪びれたカンジもなく、悪い悪いとひらひらと手を振つて、どうしてか私の周りの男共は私をあんまり女としてみてくれない。

まあ、私だから仕方ないっちゃ仕方ないんだけど、ビリ也可能もある氣のでない女根性が今後も目覚める兆しはない。

「うがー」

「だあ、もー、スねるな、悪かったって、解ったよ、悪かった「解ればいい」

「んーまあそудなあ。あーそれですか、ウメさん?」
彼はちょっとばかり気マズそうな顔で私を見て、なんだかちょっと優柔不斷な態度で私に尋ねてきた。

「んー、ナンでしょつか?」

「いやせっきの話とは違うんだケド、お前つても、占いとか予言とかって信じる?」

「予言? と言いますと?」

「いやあ、色々あるじゃない」

「はあ

「んー」

「んー?」

「いや、2943文のコトなんだけどね

「んえー」

2943文、正確には2943警告文と言つソレは、名前だけなら大層なモノのように聞こえるけど、言つてしまえばソレは単なるスパムだったりする。

呼びにくいモノは略されるネット用語の運命か、今では29文とか、肉文とかなんだか微妙にいかがわしい名称で呼ばれてしまっているそれは、ユビキタスネットワークシステムの本格稼働と同時期に増え始めたらしい。

メールだけではない、ネットワーク上の掲示板からブログにいたるまで、ありとあらゆる場所に広がつていつた差出人不明の警告文。おそらく何処かの一個人が始めたモノをネットワーク上の有象無象が面白がり、自分勝手な警告を各地にバラまき出したのが始まりだと思づ。

その内容はネットワーク上の注意やマナーから、災害時の備えにいたるまで完全にバラバラであり、本当に役に立つモノからまったく役に立たない虚言警告までその数は増える一方で後を絶たない。中にはウイルスに近いモノまで出回り始め、2943警告文に注意してくださいという、2943警告文まで出てくる始末。ナンでそんなモノが広がったのかと言えば、きっと相手に注意するつて何か気持ち良いのだろう。

匿名で見ず知らずの人間に注意をする。

まあ確かにこのご時世、ちょっと注意をするだけでも嫌なヤツ扱いつでけつこう多いしね。

一方で相手の役に立ちたい、もう一方で他者の行為をどがめたい、その中間的な感覚が人前では言えないような気持ちを吐き出せさせ、ソイツらを満足させてるんだと思つ。

勿論、ソレを喜んで受け取る様な人間は極希だし、実際のトロロは迷惑メールでしかないのだけれど。

「あーまあ、ソレは解るケド、何セ? またナンで今更?」

「お前セ、リーツチばんはじめのコノ警告文の内容つて知つてる?」「知らない」

「“この文章は警告です。本日より施行されるこのネットワークシステムはいずれ人類に壊滅的な異変をもたらします。そしてこの異変はネットワークに直接関与した人間に止まらず、社会全体に広がつて行くことになります。”とかそんなカンジ」

「うはー、ナンといつ世紀末予告、携帯の電波あびたら死ぬぞ、みたいなもんか」

「まあ、いや確かに胡散臭いしさ、餓鬼っぽいと言つかナンといつか、ンな感じだけだ」

「なーにー、ほんじょサンは、そんなン気にするの?」

「山田の自殺を聞いたらさ、あながちな、世紀末も近いかも、とか、不安になる俺つてかなりの小心者のような気がするけど」「気にしすぎだよ」

「まあ、自分で気にしてしきてると思つ」

そう言つて彼は首と手をぱきぱきと鳴らし、大きく背伸びをするとも一回申し訳なさそうな顔で振り返つた。

「フリ、ンじゅやつか

向き直つた顔はいつも明るい本城さんだつた。

「おひ、やめやる、で、何やる？ てか何ある？」

「何がある」

「タイトルは？」

「んえーと……COMBAT-HIGH、あとヴァルハラサーバー

……」

「あつ原サガあるの！ 3！？」

「出たみたいだな、3」

「んじゅ、ファンタジろう

「ん、ファンタジるか？」

「今日はファンタジりたいカンジ、夢と魔法を感じたい

「おーけ、じゅあそすつか」

と彼は喋りながらもゲームインストールを始め、その進行度合いが白い空間に青いゲージで表示される。

そのゲージの下には作業時間が表示されソコには残り約15分とまだまだ結構あるみたい。

簡単なゲームのインフォメーションが同時に流されて、ゲームの簡単な内容や、その操作などを説明するが、同時にその多くはネットワーク利用の上の注意ばかりであり、なんだか結構退屈だった。

「ねえ

「何

「ふと思つたんだケド、29文つてナンで2943なの？」

「知らん、いや全く知らないワケじゃないけど確かにことは分からん

「へえ、ナンとか説みたいな

「そつみたいな。はじめの警告文が2月9日の4時3分に出されたからツテのが有力らしいよ」

「へえ」「

「後は「クシミ」で語呂合わせで読んだりとか、まあ、誰がともなく呼び始めたモンだからなあ、正式名称つてワケでもないし、答えたんで無いのかかもしれないけどよー。結局今では略されちやつてて2943すら知らないで使つてる人も多いしな」

「まあネット用語なんてそんなもんですかねー」

そうして視線をゲージに戻せば残り作業時間は13分。

電車を待つているときとかそういうけど、待つ時間を指定されると余計にソレが長く感じるのは気のせいだらうか。

「うばば、長いね」

「今さつき始めたばつかだらうが」

「いや、そうだケド、ケーデーであーつ」

「まあ、解るけど」

「うへへ、でもそんなこと言いつつ実は」のあづけ感が一番樂しかったりするのだけどね」

「まあ、それも解るな、うん」

私たちは初期設定を済ませ、ファンタジーゲームの世界へと入り込む。

舞台はヨーロッパ的な城下町。

石畳の質感や城下町の慌ただしい空氣までもがリアルに再現されたこの世界は、私の興奮をよりいっそつのモノとさせていく。

「ちょリアルだねへー」

「だなあー、正直実際に見たらもつとカクカクしてるかと思つてた」

「あたしも、もっとポリゴンポリゴンしてるかと思つてたよ」

そして私は自分の衣装に手を伸ばし、その感触を確かめる。

ファンタジーだからなのか、それともビギナーだからなのか、そ

の質感は決して良い物ではなかつたけど、それはそう、紛れもない布の物だつた。

「うん、安っぽいけど、ピッタリ」

「ビキニアーマーは止めたの？」

「ビキニアーマーは未来の旦那さんのためにとつておへく

「いや、何と結婚する気だよ」

「ソイシは乙女の秘密でござれる、と言つか

「と言うか？」

「私は結婚するんでスカね？」

「知らんて」

城下町には既に沢山の人がいて、それぞれが異なる服装で、異なる顔をしている。

まつたく違うのだけど、何故か私にはそれが新宿の駅前のような、ある種身近な物に感じられてしまう。

それはそう、きっと有る程度の人間臭さみたいなモノまで、コノ仮想空間では感じられるからだと思う。

そう思つと、ちょっとばかり夢のよつたなゲームも冷めて見える気がした。

「そだ、ウメ

「なんスか？」

「フレンド登録」

「おお、よろしくシス

「んー」

「んおー？」

「……あーあは、いや、何か実感わかないと思つてなあー」

「んふふ、わたしも、コレが本当にゲームのかつてカンジ、モロに中世のお城だから解るけど、コレがどにじその摩天楼だったら私はその判別はつかないかも知んない」

私は自分の頬をつねつた。

鈍くて鋭い痛みがビキビキと、その後もじんわりと痛みが残る。

夢みたいなだけど、これは絶対に夢じゃない。

そうなると痛い夢ならどうやって夢か判別するんだら、自分が夢を見ているコトにも気づかないんじゃないだろうか？
それって結構怖いかも知れない。

「まあ、ダイジョブだつて」

「……何が？」

「いや、別に、あーでー、どうある？ 一緒に行くか？」

「いや……イイヤ」

「いいの？」

「ん、今日は、イイヤ」

「そつか……じゃー、あーじゃー、えー2時間、2時間たつたら口ビーで集合」

「了解です」

「あ、それから」

「ん？」

「何か体調悪く感じたりしたら、すぐ首筋のトランスマッターはがして」

「ん、解った。そのままはがしちゃえればいいんだね」

「おひ、そんで良いと思つ、そんじや」

と、彼は手を振りながら去つていいく。

私もちよちよっと手を振つて、彼の後ろ姿が見えなくなるまどソ口に突つ立つていた。

「あーやーしかしなあ」

正直なところナンで一人でやると言つたのか解らないのだが。

「うおー、なんつーかどしたらいいんだ？」

魔法剣士小梅、初つ端から路頭に迷い気味です。

仕方ないので私は街を出た。

よくある感じのサラツとした平地にはやっぱり有る程度の人気がワワラと群れていて、ナンというか中世ファンタジーな緊張感はな

く、適当に談笑している連中が多い。

単独行動なんかしないで私もアイツと一緒にいた方が良かつた気がする、自慢ではないが私は見ず知らずの人と話せるほど社交的な生き物ではなく、ましてやモニター越しですら無いのだから、緊張感はよりいつそうだつた。

「おぼぼぼ、まいってきたな、寂しいぜこれ」

なーんてひとりごちていても状況は変わるわけもなく、どんなに寂しそうにしても誰かが向こうから話しかけてくるわけでもない。ソンなことは解つてはいるのだけれど、ソレでも何か、私は世間の優しさを試してはいるんだー、的な何かで、私は強情にも一人じょぼんと座り込んでいた。

「うだーあ畜生、ゲームの中までつ、何ヤツてんだコンチクショウ」

ウ

その場に転がっていた石ころを投げ飛ばし、遠くの草むらへと消えていくのを眺めていた。

そんな姿を見てなにやらカップルみたいな二人組が笑つていて、私は恥ずかしいやら腹が立つやらでやつてられないと言つ感じ。

「くそ、カップルむかつく、死ね」

いや、まあ、正直に言つてしまえば腹がたつのドウコウよりも、寂しさと怖さの方が強かつたりする。

見ず知らずの街を歩くよりも、それはよりいつそう怖く、考えてみれば当然で、いくらゲームでアレ、自分の身体で何処へと知らない土地を冒険など出来るものか。

そうして万策尽きた私は、ねつとりとしたため息を一つついて、何をするでもなく物思いに耽るほかナイのだった。

そう言えば昔まおが言つていた。

人間独りでいるときはそんなに寂しくはないのだって。

人間が一番寂しいのは多くの人間に囲まれているとき。

都心の交差点。駅のホーム。休み時間の教室。

そんな山のよう�이人がいる中で、人は寂しくなつて、人恋しくな

る。

彼女は本の受け売りだと言つて笑いながらに話してくれたけど、確かに私はこの上なく寂しい。

世界にはコレだけ人間がいるのに、すぐ触れられる距離に人がいるのに。

まるで見えない壁が人々を区切つているように、人と人との距離はそう近くはない。

そうやつたまま私も私で自分の区切りの中に閉じこもり、個人は疎か、コミュニティーの壁にさえ触ることもできなかつた。

はじめのウチは意地を張つていた私も、だんだんと興が削がれ、と言つたか一種の諦めや飽きが混じり始める。

座つているのも心がギス、ギスするので、草原へと寝転がり、空を見て、何事かを考えるでもなく、ひたすらぼーっとすることに努めることにした。

道行く人々が時々何事かをつぶやいているように聞こえるけど、そんなことはナンかもはやドウでも良くなつていて。

実にフリーダムなカンジに野原に転がり、夏のソレとは異なる穏やかな風に包まれ、ある種の清々しさを身体に受けて私は大きく深呼吸をする。

太陽光は七色に拡散し、淡いハーレーションとして私の視界を彩る、草木をゆらす風の音も、その自然ならではの重なり合つた重厚感の波が、私の身体へ寄せて返してを繰り返している。

ソレは私だけの私のコミュニティー。

ソレは多分、今この瞬間、私が最も尊ぶモノ。

「あー…………そつか

そうして私は、今この瞬間人類なんていなくなればいい、とか思つてることに気付く。

煩わしいモノなんて全て無くていい。

お互いがお互いに壁を設けるなら、壁の向こうなんて必要ない。そっちの方が楽だし、そっちの方が傷つかない。

すこぶる頭の悪い考えなのは解るけど、それが一番簡単な気がするし、それが一番妥当な気がした。

「だからさ、だからわ」

人は独りでは生きていけない、人は独りで生きなきゃいけない。そんなこと考え、決めることなんてナンセンス。

今を生きるために必要なことは、今を生きるのに必要な選択だけ。ならば私は今を生きるために、この世の多くを否定することもいとわないし、必要と思えばその全てを利用するつもりでイルのだろう。

だから、今は、ウザイ、五月蠅い、煩わしい、邪魔。

今が気持ちよければそれで良い、ソレを邪魔する人類種なんて、今この時は独り残らず死滅すればいい。

怒るのではない、殺すのでもない、関心を失い、興味を削ぎ、意識せず、その存在を内から消していく。

感知しなければそれで良いのだ、誰もがソレを理解しなければ、ソレはこの世には存在しないのだから。
だから私はそつやつて、どんなモノだつて消すことが出来るのだ。

「おーい、小梅？」

「ん……」

見上げると、ソコには本城の顔があった。

呆れたようにニヤケながら、私のことを見下ろしている。

「何寝てンだよ」

「やや、寝てナイっすよ?」

「寝てたよ、いや、別に寝ててもナンでも良いけどサ

そう言つと彼もドテンと横になり、私の側に寝転がつた。

「今さ、もう少しで何か悟れそつだつたんだよ」

「だから、寝てただろうに」

「ソレをぶち壊しやがって」

「お前の悟るモノなんて他の誰かがとっくに悟ってるよ」

「……」

「なした?」

「んーあー、そうかもしんねーつ、なんか自信なくなつてきました
べつに変な自信つけんでもいいって」

「そつかなー?」

「そうだろ」

「わかつた、そつかもしない」

「ん、それでいい」

そうして彼は両手を前につきだして、太陽に透かし日を細めた。

「空、綺麗だな」

「だねー」

「空見るのなんて久々な気がするよ」「うはは、何時も頭の上にあるのにねー」

「あーでー、どだつた、ゲーム」

「寝てたからあんま分かんない

「そか、まあ、そんでもいいか

「いーんじゃないでしょーかー」

そして私は跳ね起きて、身体についた土草をパツパと払いのける。
久々に起きあがつたせいで頭が重く、ぐらつと大きく立ちくらみを
した。

「どわーっふ」

思いつきり背筋を伸ばし、全身で日の光を浴びついでに大きな
アクビも1つ。

「じゃあそろそろ落ちるか

「そうする?」

ログアウトする前に私はもう一回だけ空を見て、城下町の城壁を見
て、野原の先を見て、周りの人たちを見て、そして本城を見た。

「あー」

「何?」

「きつちりレベル上がってる」

「ちゃんとゲームしてたからな」

「むう、今度は一緒にやるべ?」

「おうおう、それじゃ落ちるわ」

「あつ」

そうして次の瞬間には、私たちの視界は真っ白な空間へ戻つてい
て、初めて入ったときのようなドキドキ感はもう何処にもナイ。

残っていたのは心地よい脱力感と、良く解らない達成感。

体感ゲームつてのは思つた以上にインニア派には向かないのかも
知れない。

「なした?」

「いや、別に、まあ、1つ解つたよ」

「なにが?」

「ゲームをやつてる事もまた現実なり」

「ふーん」

「むが、さては意味解つてないな?」

「ふん、まあな」

「んー……まあいいか

「いいならいいや」

「うん、まあいい」

そうして私は込み上げてくる笑いを押さえ込んだ。

「ねえ、私さ、まあと結婚するわ」

「へえ」

「まあに毎朝おみそ汁つくりもひつて、まあと毎晩イチャイチャ
するよ」

「どーしてまた?」

「そりゃーもう」

「もう?」

「私の周りの男は優しくないし、気が利かないし、役に立たないの

ばかりだからね」

心底がっかりする本城を見て、私はなにやらしてやつたり気分。自分で言つのも何だけど、結構嫌な女だとは思う。

その日の帰り道、何処か遠くでセミの鳴く声が聞こえた。だけどソレは盛る夏を彩るためのモノではなく、変わりゆく季節を惜しむようなモノに私には聞こえる。
指の隙間から砂がこぼれ落ちるよう、何かが確実に、だけど少しづつ失われてゆく。

ソレが何かに気付く頃には、全てはもう手遅れのではないかと、いう不安が、私の心を焦らせ、シメ付けていた。

ゲームの中で心地よい風に当たつていたせいか、夜風であつても、夏特有のムシツとした感覚は身体に重たく感じる。

さつさと家に帰ろうと脚を早めていた私だが、

団地にさしかかったところで、私は半ば無意識的にその階段を上っていた。

あの日以来、私はこの場所へは来たことはなく、それは、もう、自殺ごっこの必要もなく、ココに独りで来ることにさして意味がなかつたから。

だけど今日は、何だか無性にあそこへ行きたい。

何でだろうか、一刻も早くソコに広がる景色を見たい。

そうして私は、カンカンカン、一気に赤い非常階段を上りきり、ソコに広がる景色に目を見開いた。

「あはは、真っ暗じやん……」

分かり切つてはいた、日はとうに沈み、いまでは街の光りだけがぽつりぽつりと輝いている。

七色に輝くその光りは綺麗だけど、なんでだろつか夜風に乗つて私の心の隙間へと冷たく流れ込んでくる気がした。

「真っ暗だつて……」

やっぱり私は寂しいんだ。

夕日が見たかったのは、やっぱり私は寂しかったからだ。

ソレも叶わなかつた今となつては、私の田の前に広がるのは暗闇

だけだつた。

「私だつて、真つ暗だあ！」

高校一年の夏。

春川小梅は沢山の暖かい人たちに囲まれて、この上なく寂しかつた。

ハルカワコウメ

私がその男と会ったのは高校に入った始める年、その年の夏だった。

どことなくいい加減で、どことなく不精っぽく。

とりあえず所がナイ、そんな印象が強かった。

出会った当初は、まさかこんなに長い付き合いになるとは思つてなかつたし、それは相手もそうだつただろう。

だけど、しかし、彼と会つていなかつた人生は、また違つたモノになつていたと思うし、そもそも彼に出会えなかつたら私は今生きていいかもしない。

ちなみに言つておくとそれは彼氏とかそういうモノではなくて、ソコには別に世間が喜ぶようなラブプロマンスも、そして儚い純愛も転がついていたりはしない。

ソレでもまあ、彼が私の好みかというのならば、それは100%好みだといえるのだけど。

「んえ、じゃあ姉さん今日帰つてくるの？」

私はソファーに寝転がりながらカップアイスを引っかき回し、ゲーム機と格闘する父の背中と話していた。

「おお、さつき電話有つた、あつ、ちょー、何も当日に電話せんでも良いのに、ぐわーっ」「

「だは、パパ後ろだよ、敵いるよ、敵

「うおっ、ムリムリムリ！　だはーんっ」

爆音が響き渡り、赤黒いゲームオーバー画面がテレビに広がる。父は変な声を上げて床へと突つ伏し、ムリっ！　と両手をクロスして×印を作る。

「最近のゲームはアレだね、難しいよ。速いし綺麗だけど、身体が追いつかないや

「ですかー、まあこれそんな最新でもないケド」

「んー、バス、小梅の番、アイツやつっけて、あの黒くて速いの」

「おひ、まつかされおー」

と、私がコントローラーを握ったところで、父はこめかみに指を当てて慌てて私を制止する。

「あータンマ、ちょい待つた」

「何?」

「ちょっと小梅、お使い頼まれてくれる?」

「ヤダ」

「じゃあケーキ買ってきてよ、桜も帰ってくるしね、ちょっとしたお祝いで」

「ラジヤ、解つた了解した」

父は財布を探してウロウロと、私は外へ出れるような格好に着替えるために自室へと向かう。

寝巻きを脱ぎ捨て、ブルージーンズをはいて、真っ白なシャツを羽織り、日差し避けにキャップを被る。

日頃からあんまり服装には気を使わない方だけど、夏休みとなるとソレも酷い状態となり、何だか気付けば昨日も今日も同じ様な格好をしている気がした。

帰つてくる姉さん、姉の桜は今年で大学三年生となるらしい。

都心の大学に通うために独り暮らしをしているけれど、不甲斐ない私らが切り盛りする家をほつとけないのか、それとも若干のホームシックなのか、こういった長期休暇以外にもちょくちょく帰つてくることがあった。

だからまあ、そんないちいち祝うほどのコトじゃないのだけれど、父も娘に会えることが嬉しいんじゃないだろうか、しかたのないコトとも思つけど相変わらず子離れしない男である。

「何処が良い?」

「あーっとなー、駅前に山田屋のチーン店出来たろ、あそこ美味しこよ」

「ナンで解るの、パパ食べたの」

「パパ食べてないヨ？ 友達が食べて美味しかつたって言つてたヨ」

「そつか、えーと、あとはー、何買う？」

「パパはモンブランが好き、桜は何好きだつたつけ？」

「あー、あれだ、ミルフィーコみたいなのスキだ、多分」

「じゃあそれで行こう」

「母さんは？」

「あー、だはは、まあ、そうか、でもなー母さん甘いの一ガテだつたしなあ、結局最後は小梅がもう氣なんだろ？」

「勿論そのつもりです」

「んーまあ、解つたよ、じゃあフルーツ乗つてるの何か買うと良いよ、アイツ果物は好きだから」

「うん

「後、「メン、パパ嘘ついた」

「ん？」

「あそここの店、普通に美味しいよ」

「あ、うん、いや、知つてる」

駅とは言つけれど、無人駅ではないと言つ程度の小さな駅であるそれは、当然ながら利用者も多いというわけではなく、周囲にはビルはおろか高い建物も見あたらない。

そんな中に建つ色鮮やかな洋菓子大手の山田屋チーン店は、異彩を放つていてるといふが、正直場違いな気がしないでもなかつた。

買うモノを買ってさつさと帰ろう、店内のクーラーは恋しかつたけど、あんまりゆつくりしていると姉さんが帰つてしまふかも知れない。

だけどせう言つときに限つて、私は何かを呼び寄せてしまつわけで、そう言つときはきっとなにかそう言つ類の運の悪さといふか、もはや呪いか何かを受けてるんじゃないかと思つ。

「あー、スマセン」

との声が後ろから、この時点であー、みたいな何か嫌な感じというか、道を聞かれるオーラみたいなのを感じ、眉をひそめる私。

その次ぎに何を言われるか、そんなことを頭の中で考えつつ、振り向いたソコにいたのはチヨボチヨボとショボイ無精髭を生やした汚いお兄さん、と言うかオジサン入り口、年齢的には25~35の間ぐらいに見える。

まあにはよく「えー」と引かれるのだが、私はこういうオッサンが非常に好みのラインだつたりして、そんなこんなでついついトキメキメーターが振れながらも、私は「ナンでしょうか?」と落ち着いて対応。

トキメキが漏れだしてないか、正直なところ不安だつた。

「あー、とですね、キミは中学生、高校生? いや、違う、あれだ、綾川第三高校つて解るかな、ここいら辺に有るんだけど」

「え、あれ、ウチですか?」

「ウチって、あーじゃ、もしかしてアヤ校生?」

「はい、現役バリバリの女子高生です」

「その、申し訳ないんだけどさ、良ければ道を教えてくれないかな、迷っちゃって、いや、迷う道じゃないんだけどねえ……」

「はあ……ああ、じゃあ、なら一緒に行きます? 案内しましうか?」

とかまあゲンキンなモノだ。

さつきの嫌な感じは何処へやら、相手を選んでみずから道案内を名乗り出している自分に多少嫌気がささないこともなかつた。

「あれ、良いの? あー、じゃお願ひしようかな」

「はい、まあここからなら歩いていける距離ナンですぐにつきますよ」

自分なりの可愛い笑顔をそえて、私は久々に夏休みの高校へと足を向けた。

ケーキの方はまあ、ドライアイスも入つてゐし大丈夫だろう。

「アヤ校に何かご用なんですか？」

あまり品のないこととは思いながらも、道すがらずつと黙つているのもナンなので、私はとつつきやすそうな話題を問い合わせてみた。

「ん、まあ、下見かな」

「下見？」

「ん、後学期からアヤ校で生徒指導って言つかな、そーゆーのをすることになつてね」

「うげ、生徒指導……？」

「んあ、まあ、俺はカウンセラーだからなあ、スクールカウンセラーダよ、悩めるアヤ校生達に救いの手をさしのべるためにナンチャラとね」

「へえ、へー……」

「見えない、やつぱり？」

「はあ、失礼ですけど、あんまり……」

「コレでも一応臨床心理士の資格は持つてるんだけどね、まあ、根が不真面目だから。やつぱり人の精神を見る人ってのは、小綺麗な印象が強いのかもね」

「臨床心理士？」

「あーとだな、えー、臨床心理士つてのは……」

「あ、いや、やつぱり良いです。そゆコトは自分で調べますんで」

「そう?」

「まあ、はい、インターネット繋げてるんで、コンタクトも今入れてるし」

「ああ、そう言つコトか」

男は少し苦笑いをして、歩きながらは危ないから、とまた時間があるときに調べてくれるよう言つた。

通りの突き当たりを曲がればソコはもう学校なのだけど、何だかちょっと着くのが惜しいような、そんな気がしてしまつ。

「それって、耳たぶに何か入れンでしょ？ 受信機？ 何か気持ち

悪くないの」

「いや、手術もナイですし、専門店行けば1分もかからずに入れてくれるって言いますけどね。私は、これ、イアリングなんで、実際にやったことはないんですけど」と、私は耳に通したBB弾ほどの耳飾りを示す。

「あ、そなんだ」

「先生は繋げてないんですか？」

「んー、まあ、俺は根っからのアナログ主義者だからねえ、ネットだつてパソコン有れば十分だし、なんか身体がウケつけないいつもうか、まあ、携帯だつてなかなか持ちたがらなかつたぐらいだからなあ」

「へえ、今時」

「珍しい？」

「はい……あ、ソコ右です。すぐソコ、もう見えます」

「ああ、ホントだ。いや、アリガトね、助かったよ」

校門ぐぐりぐぐりちらにちょっと手を振つた先生は、グラウンドを通り校舎の方へと向かつていく。

ああ、なんかこう、勿体ない。

ナンというか、あの人ともつと喋りたいと、私はどうしてもその場を離れることが出来ない。

「せーんせー！」

「ん、どしたー？」

「コレからドウするんでーすかア？」

「んー、ちょっと先生達に挨拶して、手続きとか確認して、でー、ちょっとカウンセリング室とか見て、そんなモンだと思つ」

「ですかー」

「あ、なに、一緒に来る？」

「いいえー

「そーう

「あー、あとーつ！」

「何？」

「グラウンドは革靴厳禁でーす」

「ああ、コリヤ失礼したつ」

先生は笑っていて、そのおちゃらけた態度に、私もつられて笑いがこぼれる。

何処かで会つたことがあるような人だと思ったら、なんか父に似ているんだと、私は独り納得していた。

顔こそは全然似てないんだけど、気づかいにも似た場の空気を気にする姿勢は父とそっくりだ。

そう言う意味では私は結構いい人を見分ける目があるのかも、と言ふか私が本格的に筋金入りのファザコンなだけかも知れないが。校庭に一人残された私は、ちょっとだけ変な満足感に浸っていた。

「あつれ、なんだまだいたのつ？」

そんな驚きの声は、用事を終えた先生が校門に寄りかかっている私を見つけたときの声だった。

結局私はその場で先生を待つていて、ソレは別にドウシヨウといふわけではないのだけれど、ドウもしないのも何かであつたワケで、とどのつまりドウしたらいいかは考え中だつたりする。

ドライアイスが冷たいウチはココで待つていいようと思つていたけど、ソレが溶けきるよりも前に先生は現れた。

だったらこれは、何かのチャンスなんだと思う。
だつたらナンのだ？

「先生！」

「なあ……何？」

「じゃあ、カウンセリングしましょー！」

「じゃあつて……てか誰を？」

「私を」

「うはは」

「だあ、つちよ、何がオカシイ」

「あーいや、ゴメンゴメン、でもヤダ、先生今日休みだし」

「つえー」

「まあまあ、折角待つてくれてたんだし、お茶でも出すよ

「ああ、ん、まあ……はい」

「それにー」

「なんですか?」

「そのままじゃソレも悪くなっちゃうしね」

と、ケーキの袋を指され何故か赤面する私だった。

「そう言えば名前は?」

私と先生はカウンセリング室へと上がり込み、そのソファーアヘと腰掛ける。

生活力とかあんまりなさそうに見える先生だつたけど、ポツトからお茶を淹れる手つきはそれなり以上に慣れている感じで、独り暮らしが長かったのかと勝手な想像を膨らませる私。

「小梅です。春川小梅」

「へえ、まさに春な名前。あー俺は牛久久夫、改めて今後もよろしく

く

「あ、はあ宜しくお願ひします」

「変な名前だろ?」

「ですか?」

「あ、そうか、動物の牛に、久々の久、で牛久。さらに久々の久と、夫の夫で久夫

「あー、そりやへンだ」

「だろ?」

「親はオカシイと思わなかつたんですか? ジョーク?」

「ああ、んー、まあソレには色々とあってだなア、まあ、ナンというか未婚者なのに途中で苗字が変わつたりしたわけで、ああ、別にソレは気にしないで良いんだが、ん、まあそういうことなんだ」

「ああ、あーつ、あーいや

「だからいいって」

「あー、はい」

私はお茶を一口含み、のぞの奥へと流し込む。

そう言えば校庭で待っていたのだ、喉はカラカラに乾いているのに、自分ではあまり意識することはなかつた。

「で、何をドウするんですか？」

「あーんーお茶はおかわりいる?」

「あ、ください」

「アレだ、申し訳ないんだけどさ」

「はあ

「俺のカウンセリングしてくれない?」

「はあ?」

思わず変な声がこぼれた。

カウンセリングの先生が素人な私にカウンセリングしてくれと言うのだからそりや仕方ないと思つ。

すると先生は冗談めいた口調で、悪い悪い、と言いながら、姿勢を直して話を続ける。

「あー、いや、俺もワリと新米でさ高校生のスクールカウンセリングは初めてナンだよね、正直怖いんだよね高校生とか

「ああ、そゆことですか」

「いや、なに、あれだー、不良とかつて多いのこの学校は?」

「どですかねー、ややまあ、不良はカウンセリングとか来ないと思いますけど

「ああ、まあ、それもそつかな

「そですよ、多分」

「うーん

「先生?」

「あー、デモなんかヤだな」

「だはあ、も、せーんせー」

「あ、んー、悪い、悪い」

何だかグダグダとしていて、黙つていれば男らしいのかも知れな
いけど、喋つてみれば結構女々しかつたりした。

まあね、最近はキレる子供も多いしね。

「やあ、もう悪いつ、この話は止めよつ、暗いし……何より俺が格
好悪い」

「あはは」

「そうだ、部活とかは？ キミは何入つてんの？」

「美術部ツす」

「あ、絵とか上手いんだ」

「いえ、全然」

「あれ？ そうなん？」

「そうなんです、ナンデかもう不思議なほどに」

「そか、あー、じゃ友達は？」

「いますよ、結構」

「んー」

「も、なんですかあー」

何処をついても思つたような返事が返つて来ないつていうか。
何処から行つても芳しくない反応といつか。
なんだか正直、煮えたぎらない。

「牛久先生」

「何？」

私は意を決してというか、半ば反射的に立ち上がる。

「いや、大変申し訳ないんですけど、お話がグダグダ過ぎます」

「あー」

「あ、スマセン」

「いや、良いけど、スゲーな、ストレートだなあ、えぐるよつな

「多分」

「たぶん？」

「性格です」

「かあ」

「や、嘘です。嘘つきました」

「んー」

そうして先生は少し頭を抱えてうなり声を上げた後、そりだないと、言葉を選びつつ部屋の中を視線がきょろきょろと舞う。私も言いたいことは色々あれど、何か言おつとしている前で何か言つのはやつぱり失礼だと思うし、なら言わないのが一番だと思う。「あー、あー、あれだ、先生は、違う俺は、最近先生としてしか若い子と話してないから、正直何話したらいいのか分かんないし、なんかね、凄く緊張します。照れています」

「おお」

「ヤダね、『恋かしい』

「だはは、うはは」

「そもそもアレだな、誘つたのが間違いだつた。別に俺は昨日のテレビ見た? とかそういうのでも良いトークに長けてるワケじやないし、ならアレだよな、正直つまんないことしか話せないかも知れない」

「どうします?」

なんて言つ私は笑顔だったかも知れない、ヤナ女。

「解散しようつか」

「私はモウチョイいますけど」

「うえー、意地悪ー」

「うへへ」

「どうしたいの?」

先生はちよつと首をかしげるよつて、視線を合わせて私に問いかける。

「じゃあ、あー、じゃああれです。道案内の『褒美』

「何?」

「先生と”お話しやなくて、“私と”お話ししてください”

「だはは、成る程」

「うひひ」

「だはは」

「大体アレですよ、子供が少なすぎるんですね、もつと産みまくらないと、公園行つても誰もいないですもん、ゴーストタウンかつていう話で」

「気付くと時計まもなく5時と言つといふ、夏も後半に近づき、日もだんだんと短くなつてきている。

教室の窓ガラスからは茜色の光りが流れ込み、それは部屋の中にほんのりと暖かいヴェールをかけたよう。

空調のかかった涼しい部屋でのその暖かい光りは、私の中での感覚を若干ながらちぐはぐにさせるような、そんな光りでもあつた。「だから、俺はアレだ、山田総理の就任には反対だったって

「あれ、その話?」

「じゃなかつたの? 山田が首相になつてから、出生率が大きく落ちたつて言つ、ソーコー問題にあんま無関心だつたからなあの人」

「ああ、ソコに繋がるんだ」

「ん、まあ、でもさ、正直こーゆー話の答えッテのは何時も同じかもな」

「何です?」

「そんなことドーでも良い」

「あはは」

「政治は、興味ない。国際情勢は、関係ない。宗教は?」

「キモイ?」

「ソレだ」

「環境は、ダサイ」

「平和は格好悪い、つてか」

「むふ」

私は込み上げた笑いを押さえ込んで、ブサイクに口から息を吹き

出す。

おーおこどりした、と、先生はひかりの顔をうかがいつつに視線を合わせた。

「やはは、いや、なんか先生もなんか、饒舌になつてきましたねえ」
なんて、まくし立てたりする。

「や、俺もトークセンスはないけど結構おしゃべりな方よ。上手くないし、ちょうど良い相手がいなかつただけでよ」

「ハイハイ、先生彼女とかいないの？」

「残念ながら募集中で」

「うひひ」

「あれー、俺、高校生ってスゲー苦手なんだけどなあー、キミは変わったヤツだよ、んー」

そう言う先生には少し影が降りたような気がして、私は次の言葉を続けることは出来なかつた。

一転して降下したテンションに多少の焦りは感じつつも、そつそつと、先生の顔色をつかがつよひにして、そしてちょうどだけ、つついてみた。

「先生、何かあつたんですか？」

「んー、まあ、な

「ふーん

「……」

「話わないよ？」

「話したいんじゃないんですか？」

「ん、話したいけどね、誰にも話したこと無いし、ただ

「ただ？」

「いや、聞いたら引き返せないよ、みたいな感じ」

私は噴き出した。

コレが本心からの笑いだったのか、それとも意図的な笑いだったのか、今となつては覚えていないけれど。

ナンとこうか笑つてやれと言つ感じ。

そんな様子を先生はとても複雑そうな顔で眺めていた。

「良いですよ」

「何が?」

「引き返しませんから」

「あはは」

「ナンですか?」

「やや、「ゴメン、冗談だつて、冗談、そんなヤバイ話じゃない」

「そなんですか?」

「まあ、ねえ、俺がナンでこの話をしてもナイのかつて言つと、まあ、確かに色々と申し訳ないとは思つてゐるし、何より自分が情けなくなつちやつからであつて、ん、まあそつと口トなんだ」「はあ……」

沈黙が流れ、遠くの方からセリの鳴く声が聞こえた。

茜色に乗せたその声は、いつもよじりずつと、寂しく聞こえる。
「で、聞くの? 僕のとつておきの話」

「あ……はい」

「ん、まあ、端的に言つと、俺は唯一無二とも言えるような友人を高校生共に殺されたんだ」

「結構へビーですね」

「そんでもつて、結果的に言えば俺はその共犯だつた」

「それ……結構ヤバインじゃないですか……?」

そうして先生は席を立ち、こちらに背を向けて窓の外を見る。

夕日が逆光となり、先生の輪郭が輝きを放つ。

「いや、まあ、あれだ、別に実際に殺したワケじゃないし、一種の自己嫌悪の類だからソコはあんまり気にしないで良い。まあ、逆恨みだよ、確かに原因を突き詰めれば高校生共が悪いんだが、俺は結局アイツに何もしてやれなかつたことを悔やんでいて、ソンでもつてバカなガキどもを見ていてソレを思い出して、そして腹が立て、まあ、そんなモンだ」

「何があつたんですか？」

「ソイツは自殺したんだ。そして俺はソイツを救えなかつた」

「助けるつてコト?」

「違う、ソイツを救うためには、俺も一緒に死ぬ必要があつた」

「それじゃ……」

「約束したんだよ」

「あ、ひつ……ちよつ、と、待つ」

「俺はソイツに、自殺するときは一緒だつて、約束していたんだ」

私の胸が、音を立てる程に痛むのが聞こえた。

それは軋み、ギチギチと歪な音を立てて私を蝕んでいく。

先生とその友人は、小学校時代からの付き合いだつたそうで、言つてみれば幼なじみに近いような間柄。

家も近くにあり、お互ひが違う高校、大学へと進んでも、その間系は途切れることはなかつた。

「そうだな、ソイツは教師になりたがつてた。もともと人に教えることが好きな奴だつたし、自分の大切だと思うこととか、そう言つたことを教えたいたとも言つっていた。どこぞのB組を作りたかつたんだよ」

そうしてお互ひが違う道に向かつても、それでも何となく相手のコトを気遣つて、そして一人はお互いの夢に向かつて青春を突つ走つたそうだ。

「……その約束は、ソイツでしたんですか?」

「ちょうど……大学4年の時だつたかな、教育実習から帰つてきたときソイツ完璧に自信喪失してな、もとから俺とは違つて纖細なヤツだつたし、失敗とかにも慣れて無かつたんだろうケドよ」

「ソレでも、教師になつたんですか」

「なつたよ、俺がならせた。ケツひつぱたいて、ちよつと熱くてクサイコト言つて。そしたらソイツはなつた。ソンで死んじまつた」

先生の友人が赴任した学校は、決して不良のたむろする学校など

ではなく、逆に進学校、将来のエリート生み出すような、そつと言つた学校だった。

だけどその人は殺された、自殺するよつこと、ゆうくつと弱らせられていった。

「アイツは、そこまで言つなら俺も絶対教師になつてやる、ツて言つて、ソレでもダメだったら、お前俺と一緒に死んでくれるのかつ？ つてそう言つてきたんだ」

「良いつて言つたの？」

「言つた、勿論だ、とか言つた

「本心で？」

「若干、本心だつたけど、まさかな」

ある日、その友人から電話が来た。

友人は自分の置かれている状況、心境、自分が自律神経失調症になつたこと、今は休職状態であること等を言い、そして最後に「約束果たしてくれ」つて、そう言つたんだつて。

「その時になつて、俺は初めて怖くなつてさ、大学の屋上で待ち合わせつて、アイツのコトバがグルグルと頭ン中で回つてた。何か立ち上がるのも怖くて、身体が寒くて、毛布にくるまつて部屋の隅で俺は泣いてた。恥ずかしい話だケドな」

「それで……どうなつたんですか？」

「次の日、アイツの通つてた大学で」

「やつぱりいいです。ゴメンナサイ」

「…………自殺体が見つかっただ」

私は顔を伏せた、涙が出てくるのが解つた。

そして、自殺した顔も知らぬ先生の友人と、自分の友人を一瞬でも被らせてしまつた自分を、殺してやりたくなつた。

「先生の……夢つて？」

そしたら先生は両手を上げて。

「病める現代のコドモたちを、その病理から救うことだ！」
と、叫び。

「最も、アイツが死んだ時から、俺の救いたい相手なんていなくなつちまつたわけだが」

そして肩を落とした。

「ダア、コンチクショウめッ、コレで大体の話はお終いだ。どだ、面白かつたか?」

なんて皮肉めいたことを言ひ。

勿論私には、この皮肉が誰に向けて添えられていたモノか知つていたし。

知つていたからこそ、私はちょっと微笑んで、そつして後は誤魔化した。

「ねえ、先生?」

「なんよ?」

「私モモ、しちゃつたんだ」

「何を?」

「約束」

「そか……」

「私まだ、死にたくないよ?」

「だろうな」

「先生、助けてよ

「ムリだ」

「助けてよあ……」

「俺には、出来ないって」

そして先生は、私の髪をくしゃっと撫でて、そして立つように促した。

「よし、今日のカウンセリングはコノでお終いだ。ケーキ持つてさつさと家族んと帰れ」

「うん……」

「また来たかつたら、また来い」

「うん……ありがと」

そこまで言って、私はようやく気付いた。

先生は父に似ていいのではなく、私に似ているのだと。

先生の生き方は、何処か私のソレと似ている。

そして先生の歩んできた道は、いずれ自分の道と重なるのではな
いかという不安が私の心中を支配していた。

私には先生の苦しみがどことなく解る。

ソレはきっと、先生が躊躇として抗っているモノの正体は、私の
敵と同じだからなのだと思つ。

目に見えないはずのその敵、その痛みは、今となつては残酷なぐ
らいに鮮明だつた。

私は涙拭いた。

荷物を持つて「ありがとうございました」ソレだけを言って足早
に部屋を出た。

だから私は、部屋に残つていた先生の涙を知らない。

「ただいまー」

「おかげりー」

と、玄関に立つのは姉だつた。

「あ、おかげりー」

「んへへ、ただいまー」

「おそーい、何やつてたんだ。あの黒いの倒しちゃつたぞ?..」

「あは、ゴメンゴメンちょっと話しあんじやつて、ケーキはダイジ
ヨブだよ、冷蔵庫入れてたし、でーあー倒せたんだソレ?..」

「ああ、パパの粘り勝ちだ。さまみろいつてカンジだ」

「あはは、おめでとう」

そして、買つてきたケーキをテーブルの上に広げるのだけれど、ど
うしたことかソコには既に先客がいる。

「あんれー?」

「どしたの?」

「あは、もしかするとケーキダブっちゃつた?..」

と、テーブルの上にはケーキが並んでいて、私は自分の買つてき
たソレと見比べる。

「ああ、うん、でもでも安心せい、アタシのは山田屋のだから、東
京の味つてヤツを思い知らせちゃる」「うーん、ゴメン、こっちも山田屋だ……」

「うえー、あつれー……そんな予定ではなかつたんだけどなあ……
あは、こっちの方にもできたの?」「うん、駅の真ん前に、気付かなかつた? あのパステルの建物」

「あー、うーー、電車出た直後は半分以上寝てたからなあー」「うへへ、まあいいや、ケーキがあまつて困る」ともあるまい

「まあね」「まあね」

そう姉は笑いながら、ショートケーキのイチゴを一足先に頬張つ

た。

「お

「どした?」「フルーツケーキ」

「ん、お母さんの分

「わかつてんじやん」

「まあね」

そして私は一つのフルーツケーキを母の所へと持つて行くのだった。

夏はもう、終盤にさしかかっている。

後一週間もすれば、秋の風と一緒に後学期が始まるだろう。
夏が終わつたら私はあの部屋へと飛び込んで、そつして先生にあ
の日尋ねられなかつたことを尋ねてみよつと思ひ。

「先生は生き残つて後悔しますか?」「先生はきっと困つた顔をすると思う。」

何かちよつと唸るかも知れないし、考え込んでしまうかも知れな
い。

どんな答えが返ってくるのかは解らないけど。

もし、先生が後悔していナイのであれば、ソレはきっと私にひとつ
ても掛け替えのない明るい光りとなってくれるはず。

ソレはまるである日の夕焼けのように。

生きる私を支えるような、そんな光りとなってくれるハズ。

ハルカワコウメイ（前書き）

若干ガールズラブ的な描写があります。苦手な方はご注意ください。

ハルカワコウメイ

これは高校一年の時の話。

夏休みが始まる一ヶ月ほど前に、彼女は私たちの高校に転校してきた。

時期も時期だし、彼女の独特なキャラクターのおかげもあり、ソレはちょっとした話題性を持つて私たちの中へと入り込んでくることとなる。

そんなこともあってか、彼女がクラスになじむのはあつと言ひ間だつたし。

クラスも彼女のことナンの抵抗無く受け入れることが出来ていた。

確かに変ではあったけど、その時はナンの変哲もない、タダの転校生と思っていた私たち。

今だから思うに彼女は、私たちに日常の終わり。

さらには日常的な非日常の到来を、伝えに来てくれたのかも知れない。

「えとお、転校生の和泉てんこです。なんかむつかや中途半端な時期ですけど、どうかヨロシクお願ひしますー」

「あー、えと、いすみ？ わいすみ？」

担任がちょっと申し訳なさそうに確認をとる。

「わいすみですー。やっぱり紛らわしいですよねえ」と、作り物か自然か、ドウとも解らない笑顔。

「わいすみって読むのは珍しいね

「ですよねー」

私の印象はというと、変な女。その一言だった。

筆みたいに後頭部で束ねられた髪型もそうだし、その変なイントネーションもそう。

名前だつてだいぶ変。

総括的にパツと見で変な女だつた。

「あー、じゃあー何か質問とか会つたらー、答えますよー？」

「んあー、そゆのは後で生徒同士でやつてくれるかな、ホームルームやつちゃ わないといけないから、今日は先生この後会議なんだ。
申し訳ないけど」

「あー」

「ん、じゃあとりあえず、ソコの椅子座つて話聞いて、ホームルーム終わつたら使つてない机出すからさ」

「了解しましたー」

なんて敬礼なんかやつちゃつてノリノリな女。

アレは絶対浮くな、とか、心の中でひそひそと考える私も嫌なヤツだとは思う。

ホームルームが終了した途端、彼女は新しもの好きな生徒達に囲まれていた。

質問あるか、なんて言わなくともそうなつていたとは思つし、私がそれに混じつていなることもあらかじめ解つていてるけど。
そんなワケでどうにも興味のわかない私は、机に突つ伏し、次の授業まで寝ていようかとそんなカンジ。

「小梅えー」

「むー?」

クラスメイトの一人が私を呼ぶ。

一体何かと振り向くとソコにはさつきの彼女と、それにまあ、クラスメイト他数人が立つてている。

「小梅つて確か美術部だよね?」

「ん、そだよ、んふー何、説明とか? 部活の」

「まあ、そんなもん」

「じゃ、まあもか、演劇部だつたつけ?」

「ん、そんなもんですね」

「むー、えー、てん」「さんだよね」

「あ、どうもお、えーと、小梅ちゃん?」

「春川小梅です、まあ、宜しくね」

「ヨロシク」

「あー……」

「どうしたの?」

「うがあー、まあいいか、じゃあ放課後にでも……あー」

「んう?」

「えーと、あれだ、んー」

「はあ……」

「どうせなら、見学でもしてく?」

なんて田を擦りながら言つてしまいながらも、メンドクセーとか、
安請け合いしたーとか、思つている私、嫌なヤツ。

今日はやたらと自己嫌悪が多い。

私が自己嫌悪する時つてのは、大抵普段無いようなことが起こつたときであつて。

ソレはツイツイいつも通りのルーチンデイズから外れたために、自然とそう言つた毎日に戻ろうとするコトから産まれる心の働きなのだ。

とどいつまり私のような平凡普通な毎日を退屈と言つような人間に限つて、何があるとすぐいつもの毎日に戻ろうとしてしまう。ソレを認めてしまつのも何か嫌だから中途半端に自己嫌悪を深めてしまうのだった。

まあ、なのでいつそのこと、明るくノリノリな小梅さんで部活案内でもしてやろうかと、ちょっとばかり心に誓つ今日の私は慣れないことはあまりうまくはないかない。

「和泉てんこ、和泉てんこ」

私たちは放課後の教室で、彼女が来るのを待つてい。

「和泉、てんこ、てんこ、和泉」

「どした、ナニソレ呪い？」

「てんこ、てんこ、てんこ」

「おーい？」

「アレだよ、イメージトレーニング」

「はあーまあよくわからんが頑張れ」

「ん」

そのてんこさんは、先生から受け取るモノがあるとのことで先ほどから職員室へと行ってしまった。

どうにもなかなか帰つてこないので、私は机に座り足をバタバタ。絶対に浮くと思っていた彼女だけど、その立ち回りは随分とこなれたモノで、放課後の今までになんてコト無くクラスになじんでしまっていた。

なんだかちょっと面白くない気もするけれど、だからって別に彼女が嫌いというわけでもないのでソレはソレで、コレはコレと言つた感じ。

「やー、ゴメンなあ、先生色々ゆうふんで遅くなつちやつたわ
「あ、来た」

彼女は重そうなビニール袋を抱えて教室の扉をこじ開ける。多分教科書か何かだと思つそのまま荷物は、机へと置かれドシンという音を立てた。

「よつしや、じゅ行こひーー」

「おお、んー、美術部？ 演劇部？ どつち先見るの？ と言つかこのタイミングで入つてもあんまり活動できないとは思つけどね、来年はもう受験だし」

私よりかは大幅にできる女であるまおさんは、ソンな所にまで氣を遣つてあげている。

受験という言葉など頭の隅にもなかつた私も私だけど。

「んまあ、ダイジョブやよ」

「ダイジョブなの？」

「んー、まあ」

「何でよ? すいぶん余裕だな」

「まあー、んー、全國模試でも割と良じ感じだしね、まあまあまあ
志望校とかもう決まつてる感じ?」

「んーまあ、まあそんな感じで」

そしてまあはちゅうと、考え込み、そしてまあいかといった感じで顔を上げる。

「まあ、こいつが、ソレあたりはお互に不干涉で」

「あはは、そりやどいつも」

確かになんかおちやらけてるけど要領は良せんうだとは思ひ、まあでもなんか、やつこうのつてズルいとか、そり思つやけつ私は要領が悪い。

「あ、で本題よ、本題」

「ああ、だね、ですね、どんな部活が良いの?」

と私は気を取り直して彼女へと問いかける。

「うーん、まあ、ナンだろね、ダラダラやるよりかはガツーンと活動したいンよね、まあ運動部はヤなんやけど」

「スポーツはできないんだ?」

「いや、デキルよ? 出来るンヤビー、ま、アタシは根っからのインドア派だしね、体育会系のノリもあんま好きじゃないから」「成る程、あー、まあそれは分かるのだが、つえー、でもなら、でもなら、ウチの部より、まあおんトロロの演劇部の方が良いこと思ひ、ウチはアレだ、全部眞幽靈みたいな部活だから」

「そなん?」

「あはは、まあねえ、小梅ソントヒの氣無いのが集まつてるか?」

「んー、できればもうひとつやつてほしかつたな、私の意味無いやん」

「うはは……あー、『めんな、別にそんなつもりじゃなかつたンケドね、んー、んじやまあ演劇部見せてもらおうかな、いや悪いね、

ソレ言つためダケに残させちやつて

「んー」

なんて言いつつも、どうにも私の肩すかし感は拭えない。ハリキリ全部無駄になつて、なんだかどうにも面白くナ。どうにも修まらない氣もあるようだ、私は引き下がるわけには行かなかつた。

「んじゅー、私も演劇部見に行くぜ、良じよねまお~。」

「別に、自由だと思うケド?」

「よしよしまあ、決まりだ、ござゆかん、ござゆかんー」

ど、まあ、自棄とテンションに任せ教室を飛び出したのは良いけど。

「あ、あの、ソイエバ演劇部つて何処にあるんスか?」

「おじおこー」

まあは大げさなリアクションで肩を落とした。

そんなんこんなで久々の部活動見学。

部室へ入つた瞬間にソロにいた全ての人々から挨拶をされるまお。何だかいつもの彼女とは違う感じで、ソレだけこの部活に眞面目に取り組んでいて、この部活が眞面目に行われているとの説明のような気がした。

「部活動見学に来た和泉てんこです。」

「その付き添いの春川小梅でーす……」

まあ、見学と言つても上演するような劇の練習は今の時期は無いらしく、主立つた練習と言えばストレッチと发声練習程度。

こんな私にしてみればソレはあまり面白そうには見えないのだけど、てんこちゃんは先ほどから興味深そうにソレを見つめている。

言葉にして言つのなら興味津々ですよと、示しているようなカンジ、ああ、なんかこいつコイツなら眞面目にやるんじゃないだろうか、つてそうカンジさせるオーラが出てこるのが凄い。

「ソレができる女とこうやつかしい。」

当の部員達と言えばこちらも流石現役部員と言つカンジ。

発声練習で出てくるのはいつたい身体の何処からそんなモノが出るのかとこう広く厚い声。

ソレは部屋中をまね回るようにして、私の身体へもぶつかってきた。

人間本気になればどんなことだつて出来そうだなど、なんか妙な可能性を感じてしまう。

「あ、どうかな、見学してみて……？」

「ど、てんこぢゃんへと部員の一人が声をかける。

ちょっとじばかり童顔で、ちょっとじばかり慎重の低い男の子的な男。そのワリには口振りは対等で、って、コイツ一年生か？

「いや、もう、ホント凄いすわ。」——真面目な演劇団体つて近間にはなかつたから、や、なーもーもう入部しちゃいたいぐらいつ「あ、なら、入部届け持つてく？ 入りたくなつたら書いて持つてきてくれればそれで良いから」

そう言つ彼の背中をつつき、ちょっと質問を投げかける。

「なあなあ、キミ一年？」

「二年だよ。クラス隣だろ」

「んえー、そだつけ？ ゼゼン記憶になインだけど」「んー、噂通りとぼけてんのな」

「あ、ナニソレ噂つて……？ ヤナ感じ」

「別に、そのまんまの意味だよ、はい、これ入部届けね」「やー、どもですー」

「ナンだかな」

とは思いつつも、せつかくの機会。

普段は聞けない部活でのまおとかも、色々と見てみたいとも思っていた。

「ねえ、ちびっここの」

「うえー、ソレ俺のこと？」

「ん

「おまえと回^じぐりいはあるだろ」

「いや、まあ、どっちでもいいや」

「よくねって、まあ……で、何、何さ?」

「あー、やあ、部活でのまおってどんな感じのかナーと思つて」「俺にしてみれば、普段のまおを知らないんだけどな、部活での、まあ、ね。んあー普段がわかんないからどう言つたらいいのかは解らないけど、まあ、部のエースだよ言つてみれば、多分演技力も、発声も、動きだって部内で一番だと思つ、賞だつて結構もらつてるしな、お前まおの出てる舞台とか見たこと無いの?」

「うん、無い」

「薄情な」

「いや、だつてねえ、本人も興味が出たら見てくればいいって言ったしね、タダちょっと興味出てきた。今度舞台つて何時?」

「あー文化祭かな、多分、他にも学校行事以外でヤルかもだけど、そつ言つのは流石に見ないだろ?」

「1)明察

「だと思った」

「あー、ついでに言つと知は?」

「俺が、何?」

「演技」

「あんー、俺は、あれだ、味噌つカスだ。そもそも俺の役つて何時

も

「子役ばっかり」

「そのとおり」

彼はその小さな身体で思いつきり肩を落とした。

ツれない態度だけど、何だかんだで話を合わせてくれているあたりワリとイイヤツなんだと思つ。

てんこさんはといふと、そちらの部員を捕まえて話し込んでいる。相変わらずに場慣れが早いといふか、何処にでもとけ込める女だ。

何というか、少しばかりつらやましくなつてくれる。

何だろうか、ちょっとおもしろくない。

何でしようか、今日の私はかつて悪いな。

いつもかつて悪いけど。

「んあー、かえるかなー」

「あれ、帰んの？」

「んー、見たいテレビあるし」

「ナンだそりゃ」

「まあと、てんこぢゃんハーッ？」

「あたしはまだいるー、今日は練習日だしね、と言つかアンタも部活に顔出してやんなよ」

とのまあ。

「あー、じゅアタシもお暇しよかなー、お供しますぜ小梅さん」とのてんこ。

「いーの、幽霊部員でも良いからつて入ったんだし、んーじゅ、頑張ってね」

「おー」

そして振り向いて。

「で、お供つて何よ」

「一緒に帰りましょ、的な意味で」

「ハイハイ」

何だかんだで私もこの女の術中にハマつてこいる様な気もしなくもない。

「マジか！ 絶対快晴だつていつてたのにー。」

「天気予報は信じぢや駄目ー！ とは言えアタシもハレだと思つてたケドーつー！」

突然の土砂降りで、辺りは視界すら遮るよつた集中豪雨。

私は近くにあるという彼女のアパートへ避難させてもらひつと

した。

とりあえず身体が濡れるより荷物が濡れる方がイヤなので、必死に身体で鞄をかくまいつつ、私たちは水しぶきを上げるアスファルトの道を全力疾走していた。

チャババババババ。

「うおー、靴がガポガポ言つてゐ、キモチフルイー、でもなんかオモシレー」

「あーあ、教科書置いてきて良かつたー、全部買いなおしになるコだつたわー」

「ケータイはダイジヨブ?」

「んよよ、アタシの完全防水だシ、だいじょーぶ

「ウメちゃんは?」

「アタシ持つてないからだいじょーぶ

「あ、そなんだ」

彼女の部屋、薄暗く、彼女の性格、印象には似合はず荷物はあまり無い、がらんどう。

アパート暮らしの友達つていなかつたからあまり見たこと無かつたのだけど、やはり一軒家と比べるととも狭く感じる。

1つ壁の向こうの雨音が、ちょっと古めかしいアパートを叩き続ける音が響いてくる。

バダダダダダダダ。

「お風呂、入つてく?」

「うえ、いいの?」

「そんなんビジョビジョで帰れなんていわへんよ、まあ、広くはないけどさ」

「んやや、全然構わないって、アリガト」

そんなわけでちゃんとお世話になつちやう私。

今日初対面なのに随分なモンだと思うが、それとも彼女がそう感じないようになさせているのだろうか。

最初は夕立だと思っていた雨音も、いつまで立つても止む気配は

なく、これは本当に帰れるんだろうかと、あゅうとばかり不安がよぎつてしまつ。

「服、おいたでー」

「あ、アリガト、つて、その格好はナンショウか」

お風呂場に顔を覗かせる彼女は、なんかもうバスタオル一丁だつたりで、何かバリバリに一緒に入る気マンマンなんですが。

「狭いってこーゆー意味か……」

「うへへ、女同士ナンだから細かいことわくん」

その距離、もはや密着状態。

一人でピッタリな湯船に無理矢理は入り込んでくる彼女は妙にテンションが高く、私はちょっと引きながらも、なんだかんだでもう慣れていたりもした。

そればかりかお風呂につられ、ちょっとじぱかり気を許している自分がいる。

いや、許しちゃいけないわけではないのだけれど。

「あれ……」

「なん?」

「んー、わたしー、チヨットでんちやんのコト悪く見てたかも」

「あはは? どんな感じによ?」

「や、なんか空氣読めないような、タダのハイテンション女みたいな」

「へえー」

「何?」

「いや、別にそのままだと悪いよ、多分ソレで正しい」

「やう?」

「あははー、まあ……悪いのは考え方じゃない? ハイテンション

は格好悪い、突っ走るのはダサイ、無駄に明るいのは馬鹿なんじゃないか、みたいに」

「そんな……、口にあるかもなー」

「アタシもそうだったからねー」

「そなの?」

「んふふ、引っ込み思案で、する前に失敗したらどうしようつって、

ヒキコモリ発想だった」

「信じられる」

「前に前に出ようとする連中とかアホらしいとか思つてたんだけど、気づいたときには私は何もして無くて、何処にも進んでいなくて、そして彼女は一拍おいて、

「結局一番アホやつた」

「あはは」

「まあ、「コレは持論だけどこの時期の子供つて、て言つがヒトつて、斜に構えるのは格好悪いとか氣づいても、どつか捨てられないトコロは有るんだよね。恥ずかしいとか、自分を押さえるような気持ちがそのままソレを出来ない自分を妬ンじやつて、そんなヤツ馬鹿だよ、みたいな発想に行き着いちゃつて、いや日本人的な考え方なんかも知れないけど」

「そうかな」

「ソウだとアタシは思つ」

「んー、まあ、考へてみるとよう分からんくなつてくるな」

「うへへ、まあ、それはそれで良いと思つ」

そう言つと彼女は私にピッタリと抱き付いてくる。

突然のことでの声が裏返る。

「ひちよ、何やつてんスカッ?」

「別に? 折角だから」

「なーにが折角なのか良くなつカラんからーつ」

「え、や、なんじやろ、梅ちゃんとお風呂入つた記念?」

「記念で抱きつくなつちゅうー!」

「や、もう好きになつてまう」

「ぎやはは」

「うひひひ」

「あはは」

「んふ」

「はー……」

「アタシ、難しこトトわからんもん、単純な方がええつて
「それは同意する、けど、スキンシップ過剰だぞ」

「えんよ、ヒトに好いてもらひ血身があるから、好きだと思つたら
躊躇わづー」

「うは、ちょっと、やふつー！」

「と、変な声出すなやあーっ」

「だつて、だつてやしーっ」

「ぶははつ」

「あははは……」

「あー」

「ん？」

「んー、何か知らないけど、てんじゅわやん格好いいな
「格好いいすか？」

「ん、男らしい」

「ダメやん」

「はは」

「なんか、でも良いね、てんじゅわやん、凄くイイや、良く分かんな
いけど、好いてもらひ血身があるとか、滅茶苦茶格好いい」

「アリガト」

なんて空氣に乗せられつつ、私もちょっとハグし返しかやつたり。
大胆ですね。

「うわわわわ、『メンンね、』『お世話になつたもつじやなかつ
たんだけど』

既に7時を回つてゐるのだけど、畠に止んでくれる氣配はない。
ちやつかりついでに小ちやぶ台で夕飯まで『うちわ』になつてしまふ、なんだか申し訳なさまで感じてしまふ。

とはこえ出てきたのは買い物込んでいた「ノンビリ弁当」なのだけれど。

「やー、やー、ぜぜん気にせんとーな、いつからも梅ちゃんいてくれておもしろこしね」

「つはは、そりゃ“ひづか”」

「そんな会話も降りしきれたぬ箇音にて遊ばれ、じめわざとされになつて相手の耳へと届く。」

「あー、なんや本格的やね」

「ん、まいつたね」

「あー、あれよ、ウチ泊まつてへつ。」

「あれ、良いの？」

「まあ、良じよ、て言つか泊まつてへつよ、何かアタシも凄く楽し

い」

「えー、えへへー、あー、うんー、じゃあお葉に甘えておせわになつちやおかなー……あー、電話良い？」

「あ、ゴメン、まだ引っ越したてで繋がらんのよ、アタシの携帯使つてな」

「あや、すこやせん」

父はなんて言つか、あの小梅が初対面のこの家に泊まる…？ なんてカンジで、ちょっとむすつとしたけど、相手が女子と確認したその後はサラリと口にしてくれたのでアリガトつてあつさつ話は終わつた。

意外といえば意外。

「良じつて」

「ヨカッター」

「あはは」

「どしたん、嬉しそうな顔して」

「いや、そう言えば友人の家にお泊まりなんて初めてだと思つて

「ん、まあおちやんとかは…？」

「遊びに行つたことは数え切れないけど、泊まつたことはないなあ

「へえー」

他人の家というのは不思議なモノで、自分ではない誰かが一つ屋根の下で過ごしてきた、そう言つた思い出が、軌跡が、全て染みついたような、そういつたモノ。

自分のソレだけでも膨大な量なのに、全ての他人、全てのヒトに、家があつて、ソコにそれぞれの歴史が詰まつてゐる。

そう考へると凄い」と。

そう考えちゃうとキリがない。

人の家に泊まると、その一部を味わえるような気がして、いつもはみれない何かがみれる気がして、遊びに行くだけとは違う、何か別の物を味わえるような気がして、私はチョト嬉しかつたりする。ワクワクする。ドキドキする。

まあ、今回は引っ越ししたばかりの家なんだけどね。

「あれ、そう言えば」

「なにー？」

「ご両親は、仕事？」

「あ、んー、いないよ」

「え、一人暮らし？ スゴ」

「違う、いない、もういなーい」

「えあ……」

「死んじやつたって言うか、殺されちゃつた。まあ親戚のおばちゃんとか助けてくれてるから、何も困つてはいないしね、アタシ自身もうあんまり気にしないから、別に良いよ」

「あ、」……めん

「だはあ、いいつてー、普通気になるモン、当たり前だよ」

「んー……」

「制服干したら……もう寝よか」

「うん」

「ゴメンね、テンション落とす気じゃ無かつたんだけど」

「なんで、てんこちゃんが謝るのぞ」

「アタシだって、湿っぽいの嫌いやもーん」

「ふう、うふ」

笑い話だけど、布団は一つしかなかったので狭い布団に一人で潜り込むと言つさつきと同じような状態。

私は寝相が悪いので、多分てんこちゃんは夜間にのされると言つことをあらかじめ忠告しておいた。

「ホントはね、夜つて苦手なんだ」

「ん、ナンですか？」

「ヒミツ」

「なんだそりや」

雨音はますます激しさを増し、台風ナンじやないかと思つほどどの風は窓を大きくゆらしている。

しばらくの間続いた沈黙は、雨風が峠を越して、よつやく破られることとなる。

「あー、電気消すね」

「あ、ん」

天井の蛍光灯から伸びる紐をガツチョンと引っ張り、辺りは隣の彼女の顔すらも確認出来ないほど真っ暗になつた。

「うひひ、なんかワクワクしてきた」

「あはは」

「実はアタシも初めてなんよ、友達と泊まるのつて

「そなんだ」

「うん、あー、真っ暗だと寝れないとか、ナイ？ ダイジョブ？」

「うん、大丈夫、真っ暗で良い」

「そう」

そう言つと彼女は再び布団をかぶり、何だかチョット笑つて見せた。

「あのや」

「なにやー？」

「私のパパとママを殺したのは、私の友達なんだ」「そう言つと彼女はもう一回、にへへって笑つた。

「その友達、仲良かつたの？」

「ん、毎日遊んでた」

「なんで？」

「解んない、二人を殺した後、すぐにその友達も自殺しちゃつたから、だから、何を考えてたのかは解らぬじまい」

「後味悪いね」

ソコでもう一回、にへへ。

「でもね、少し、内心ね」

「何？」

「嬉しかつたりもしたんだ」

「そうなの……？」

「私のパパは、旭インテリジョンスのお偉いさんでね、あー知つてる？ 旭インテリ、今のゴビキタスの基礎を作つた会社」

「うん、知つてる」

「まあ、仕事のムシッて言つが、ソレしか興味がない人間でね、私も実の娘なのに数えるぐらいしか話したことがないんだ」

「……お母さんは？」

「ママは、あれは……豚だよ。好きなことはお金を使う」と、高い料理を食べること、ヒトに皿纏をすること、パパの稼いだお金をまるで水みたいに垂れ流して、ブランドモノとか買って、絵に描いたような典型的なブタ女

「そつか……」

「私の友達は、ママだけを徹底的に殴り殺したんだ。バットで」

「お父さんは？」

「頭を一回殴られただけだった、見つかったときパパはまだ生きてたんだケド、結局病院で死んじゃつた」

「そつか……」

そして彼女は一拍呼吸をおいて、そうして続ける。

「まるで、アタシがやつたみたい」

「やっぱり、お母さん、嫌いだつたんだ」

「うん、パパはソコまでじやなかつた、もちろん好きではなかつたけど」

「そつか」

そして若干の沈黙、雨の音がバダバダと手当たり次第にたたき続ける。

「やつぱてんこちゃんてすげーな」

「んふ、なにが？」

本当に不思議そうにしながら、彼女は軽くほほえんだ。

「だつてさー、よくそんな切り替えられるつていうか、普通そんなに明るくなれないもん。私がもしてんこちゃんの立場だつたら、下手したらその友達の後を追いかける羽田になつてたかもしれない」「別に持ち上げないでもいいよ、同情とか、そういうののために言つたんじゃないし」

「じゃ何のため？」

「あー、はは、何だろね？」

「なんじやそら」「そら」

「まあ……確かに、樂じやなかつたよ、何度も死にたいと思う程に辛かつた。だけど、アタシは生きることに意地汚いから、生きるためにだつたら何だつてやるし、そのためにならいくらでも自分を作り替えられると思う。タダ生きる事がどれだけ大変なのか、私はそれを知つてゐから、だから私は生きることに妥協しないし、生きるための努力は欠かさないつもり」

「うへへ」

「なーにーい」

「タダ生きるだけがどれだけ大変か……かあ、なんか悲しくなつてくる」

「んはは」

「私も、これから先、簡単には生きられないのかな?」

「たぶんね」

「あは、こえー、ずっと高校生でいてー」

「んふ、ふう……」

「でもさ、マジメに生きてるのって、生きる」とて眞面目なつて
格好いいよ、やつぱり」

「アリガト……」

なんつーか、なんといつか、私はある種この娘に惚
れていたのかも知れない。

自分のできない生き方を先行するような、あこがれの先輩的なそ
ういったパワーを秘めているのかも知れない。

彼女はそう、まるで太陽のような人だから、そしてそれは自らを
育て上げた結果なのだ。

自分を照らすための光が、そして今はその周囲にも光を振りまい
ている。

「あああ……」

「どしたの?」

「て、テレビ、見忘れててた」

「あはは、『愁傷様』

雲一つない空が広がる翌朝。

まるで台風一過みたい。

「んは、あ、あー……」

「おーおはよ、起きた?」

「お、おつ」

「すゞい寝癖

「あ、あおー、一瞬どこだかわからなかつた

「うえへへ」

彼女がカーテンを開けると、青い日の光が差し込んで私はぐわー
と身をそらす。

「灰になる」

「ならんて、はい、朝ご飯、コンビニ弁当は癖になるね」

「えー、へへへ」

「でもや、あんまりのんびりしてられないへんよ? 今日だつて学校あるンやから」

「あれ、あ、あーー?」

「そーんなことだらうと思ウたわー」

「てんこちゃんは、朝ご飯は!/?」

「もー食べました」

「ひつどい」

私は飛び起きて、急いで制服に着替える。

だいぶ乾いてはいるのだが、しつとりとした袖に不快な表情は隠せなかつた。

「あー、がああ! も嫌!」

突然雄叫びを上げる私に、彼女はおよよと身をすくませる。

「な、どしたん?」

「もーいいや、遅刻していくべ

「うえー、マジですか?」

「うん」

「せつかくのお泊まりなんだから、なんかもつたいたいない!」

「そーゆー問題ですか」

「わかつたら、ほら、頭使つて、良いんだから

「なんよ?」

「だから、遅刻してもー、怒られない理由を考えなさい! できれば出席点減らされないよつなクールで、気の利いたやつがベスト!」
彼女は目を丸くして、しばらくキヨトンとしていたが、ふつと人の悪い笑みを浮かべすぐと立ち上がる。

「うはは、おーし、よつしゃつやつたるか

「よつしゃよつしゃー」

ある意味では、それが私たちの日常の終わりだったのかもしけな

い。

そうして私たちは、この町は、日本は、世界は、簡単に生きられる世界から切り離されていったのかもしない。

それは戦争とも、天災とも、テロとも、疫病とかその他諸々の力タストロフとも異なり、まるでゆっくりと壊死するように、私たちの日常は終わりを告げていく。

誰一人として気づくことはないのかもしないが、ある意味ではそれが、大人になると言つことなのかもしない。

あるいはそれが、生きると言つことなのかもしない。

ハルカワコウメ e

これは全てが始まる前の、私がまだ子供の頃のお話。
私の父は東北の地方出身で、家族皆で父のそのまた父の家へと年に数回遊びに行っている。

何も疑うこともなく、何も苦しむことのなかつたそのときの私は、今でもその時を思い出し、なんだか羨ましいようなそんな気持ちになることも少なくなかつた。

さんさんさんと降り注ぐ日差しの下、父と母、そして私と桜姉さんは、父の借りてきた軽自動車に揺られその父の実家を目指していた。

山奥にあるそのくたびれ気味の小さな農村は、正直排他的な空気があつたりなんだりして身内親戚でないと入り込みにくいところらしい。

父もまた、以前こそソコの住人ではあつたモノの、都会へ出て、結婚して、子どもまでもうけた今にしてみれば村人にはれば他人も同然であり、つまりはまあ、そうほいほいと気軽に帰れるような場所でもなかつたりする。

「ねえー、あーなたつ

「んー?」

「やつぱり車はいつものところで借りた方がよかつたんじゃないの、いくら軽だからってパワーなさ過ぎ」

「あはは、まあ、ねえ、安かつたからさあ、ついね、安かつたし、まあレンターカーショップで車の性能が決まるわけでもないし」

「まあ、つけばいいですケドね」

「はい、頑張ります」

そんなこんなで急勾配をへろへろになりながら車は進み、一つ坂

を登り切つたところでようやく木造建築の並ぶ小さな山村が視界に入ってきた。

「いよっし、小梅、桜！」

はいっ、と元気よく応答する私ら姉妹。

「二人はひとつ走りして爺ちゃんの家に行つてくるんだ」

「父さん達は？」

「父さん達はアレだ、村の人たちに挨拶しに行かないといけないんだ」

「わかつたつ、ねーちゃん！ 勝負だ！」

「何を？」

「先に爺ちゃんのところへ勝負！」

「んえー」

「じゃあスタート！」

そして私は車を飛び出し、あわてて姉も何事か叫びつつ私を追いかけてくる。

まだ初夏の日差しが清々しい頃、パタパタと地を蹴るサンダルの音と、協調性なく飛び交う蝉の声が耳に残っている。

「だあーっちょ、こいら、待ちなさいてばー！」

姉が追いかけながら叫ぶものの、圧倒的なスタートダッシュによつて私の独走態勢は揺るがない。

そんな私たちを見てすれ違う村人達が首をかしげて振り返る。

「うあーばー、よっわーー！」

塀の角を曲がりお爺ちゃん家の敷地へと駆け込んだ私は「ゴール！」とひときわ大きく叫び、両手を空に向かってつきだした。

「だあ、くそ、負けた」

「ふふん、勝った」

「まあ、どっちでも良いけど」

「いいのか……」

お爺ちゃんの言えには小さな庭が広がっていて、その隅に小さな

煙があつて、さらばその隅に小さな池がある。

「あー、お爺ちゃん、また隠れてる?」

「隠れてるかも、隠れてるかもしれん」

隠れている。というのは、まあ、我らがお爺ちゃんといふのは変わった男であつて、私たちが来ることを知るやいなや、かくれんぼと称して家の何処かに隠れていたりする。

前回は事前に伝えて無かつたため隠れる前を発見できたものの、その前は完璧に姿をくらまし、父母一家総出で探し回り、夕飯どきになつてようやく屋根の上にいるお爺ちゃんを発見したのだった。

「今回はどうだうね」「今回はどうだうね」

「やー、どだう、かくれんぼスキルも上がつてるかも知れない」

「んー、夕飯までに見つかりますよ」

「出てこなかつたら先食べちゃえば良じよ、ソウすればきっと出でくる」

「成る程」

そうして私たちは「こんにちはー!」「おじやましーまーす」と叫びながら家の中に上がり込み、お爺ちゃん搜索を開始するのだった。

勿論分かり切つたことではあるのだが、チヨシトやそつとではお爺ちゃんは見つからない。

なんと書つのだらうか、長年の知恵と経験と、それにちょっととの年金までも利用して完璧な偽装工作をするのだからソレも仕方ないことだと想つ。

以前には一セモノの壁をこじらえたこともあつた。

「どう、いた?」

「いない、いるわけない

「だいじば?」

「イナイヨ」

「屋根とか」

「一回連続つてコトはないでしょ」

「うんむー」

とソロでガラガラッと扉が開き、庭に車を止めた父母も合流、結局一家そろっての捜索となりそう。

「なちやー、爺ちゃんいないか?」。

「いない、みつからない」

「父さんはアテない? 昔は住んでたんでしょう?」

そう姉が問い合わせるも父も両手を上げてまいつたという感じ。

まあ父がアテになれば、コレまでも苦労するはずは無かつたのだから当然と言えば当然。

「まあ、手分けして探しよしょつよ、アタシナーニーゲにコレ楽しみなの兀!」

「うーん、んー? んー」

押し入れを開け、床下を覗き、屋根裏にもその捜査網は広がる、一階だけの平屋建ての建物ではあるけど、その面積は広くそしてまた隠れる場所には不自由しない。

お風呂場、台所、居間、廊下、寝室、玄関と、思い当たるところを片っ端から探してみるが、その姿は何処にも見つからない。

「あー、このかくれんぼってさ、範囲つて決まつてるの?」

「さあ、ルールが有るわけでもないしね」

姉は額に浮かび上がった汗を拭いながら、腰を伸ばす。

「あつづー、小梅ダイジョブ? 休憩しようつか?」

「ん、んん、大丈夫」

「んー」

「んはは、頑張つて、頑張つて」

「ばれてるか、あー、でもさー、これつて家の外に隠れられたら完全に見つからないよね」

「んー……」

そして私は何気なくぼやぐ。

「なんだかさ、お爺ちゃんダイジョブかな、こんな熱い中ずっと隠れてちゃバテちゃうんじやない? 流石に、若くないんだし……」

「あはは、まあ、ねえ……ノビた状態で発見なんて勘弁だわせ」

「ん…………んお？」

「どうしたの？」

「わたし、閃いた」

「おお？」

「池じゃない、池？」

「池か！ そりや池涼しいね」

「池かも知れない」

「池、とりあえず言つてみよう池」

「うんー」

「私たちは庭へとかけだした。」

「「うー」、あれ、ソウじやない…………？」

「私たちがいつてみると、小さな池の隅っこからぼくぼくと泡が上がりっている。」

「ぼくぼくぼくぼく、明らかに魚や何かの呼吸ではない、そこの見えない薄汚れた池の奥底にもつと大きな何かが潜んでいる。」

「あやしい、あやしい」

「んー」

「そして姉はひょいと小石をつまみ上げ、ひょいとその泡の場所に投げ込む。」

「んふん、と沈む石にあわせるよつこ、ぼくふつ、と泡が大きく吹き出た。」

「いるね…………」

「んー…………」

「第二射、いきまーす」

「ソウ私が叫んだ瞬間に水面が大きく盛り上がり、そこからウホウヒースースと酸素ボンベを携えた老人がのっこりと現れた。」

「だあ、つちづくしょうめ、コンチクショウツ見つかっちまつたい」

「こんちはーおじいちゃん」

「おー、なんだ今年は随分呆氣なくおわづかまつたなア」

「うん、頑張りました」

「じょーできだ、あー、あいつらももつ来てんだろ? だつたら飯にすんべ、飯に」

「まあ、その前にさ」

「あ、何?」

「お風呂は入りなよ、お爺ちゃん……」

「おお、まあ、そつか」

藻や浮き草にまみれ河童のよつになつていてお爺ちゃんは、芝バラセと池の縁からへばりつゝよつこなつに上がるつてくる。

濡れたウーットスースが泥をこすり、その体はもはや汚れてるとかそういうレベルではなく、私は思わず顔をしかめていた。ソンな私を見て、お爺ちゃんはニヤリと笑つていた。
なんだかよく分からぬけど、私はこの笑みが大好きだった。
そしてもちろん、お爺ちゃんのことも好きだった。

「おおー、そんでよ、そつちの方はどうなんだ?」

決して大きいわけではないちやぶ台を囲み、父とおじいちゃん、そして私と姉さんはちよつと遅い昼食を取る、母は台所でお茶を入れていた。

「やあ、まあぼちぼちだよ、会社も安定期に入つたし、これと書いて事件もないし、平穀無事」

「おめえ、じゃねーよ、俺は小梅や桜に聞いてンだつて」

「ああ、はい、はい、ですか」

まあ、当然のことだが私たちにもそつ大した事件があるわけではなかつた。

小学生の夏休みなんてソンなモノで、何だかんだで後半になつては学校がつらやましくなつている頃。

「あはは、まあ、ソンな所」

「んだ、そつなんかよ」

「そんなんです。早く学校行きたくなつて来ちゃつた」

「やあ、まあ、なー」

「おじいちゃんは?」

「ん?」

「最近の生活はどうですか?」

なんて言われて何か答えにくそうなおじいちゃん。

ガジガジと箸をくわえてなんだかモガモガモガ。

「別に、どうともねえけどよ、毎日畠と、後はテレビだ。木曜のドラマが面白い」

「ドンなんだつけ」

「いや、まああんまり覚えてねーんだけどな」

「なんじやそりや」

「ぎはは」

そういうえば、と、前置きをおいて父が話に割り込んでくる。

おじいちゃんは一瞬顔を向けて、あとはそのまま「飯を食べながら話を聞いていた。

「あ、いや、大したことでもないけど、この村も人が減ってきたねつて」

「ああ、まあな」

「向かいの山田さん、亡くなつてたんだ」

「んん、割とつい最近だけどな、最近急がしいつづから特に連絡はしなかつたけどよ」

「それはどうも」

「村長の所も奥さん逝つちまつたしなあ、びつなんのかね」

「そうかあ……」

何ともいえない静寂が入り、そうして次第にその空氣に耐えられなくなつてきた私が口を開けたとした瞬間、もつと先に耐えられなくなつた人がいた。

「んーつだよウ、なんかあんなら言えつての。さつきからグチグチグチグチ、グチグチグチグチ、グチグチグチ、かえつて話しにくい

ムードにしてビーすんだよ？ なあ？」

「あー、いや、んー」

「だあ、からお前は何ツーか、何ツーか何だよなあ
解つた、解つたよ言つて、言つから、言います」

「おう言え、今言え」

「そうして父は一呼吸間をおいて、話しう出すのだが。
「前から言つてたことだけぢや……」

「ヤだね！」

「ちょ、まだ何も」

「ヤなモンはイヤなんだ。うし、まあ、どっか行くか、なあ、小梅
たちもさ、何にもねーけどよ」

とかなんとか、『飯も中途半端に私たちを家の外へと引っ張り出
した。

何かちょっと、幼い私でもこれで良いのかなと、不安になるよう
な父とおじいちゃん。

まあ実際の所、昔からおじいちゃんは『んなだつたらしいし、昔
から父は引っ張り回されていたらしい。
父べつたりな私の家族形態からは想像もつかない形だけど、なん
といふかどこなく新鮮だつたりした。
家族つてホント多種多様だ。

「おじいちゃん、アレでよかつたの、『いか何があつたの？』
いついつとき姉は食い付きが言い、まあこのときは心配してと言
うのが大きかつたろ？けど、新しい話につつむのはびからかとい
うと姉だつた。

「別に、どうもいつもねえけどさ、前からなんだよ、一人暮らし大
変だろうから、いつちに来ないかつて」

「え、おじいちゃん引っ越していくのー？」

「小梅つ

「なに?」

「何じゃなくて、まあ、いや、まあいいか」

「ぎはは、まあ、まあ、俺アは行つても良いんだけどよ、俺だつて
もつこんじゃない年何だしなあ、どんな広い家でも使えないジジイが
一人いたら居心地悪くなつちまう」

「そんなことは、ナイと思つけど……」

「まあ、良いんだよ、動いたら動いたで家も畠も捨てなきゃならな
いしな、売る相手もいないから、あれだ、耕作放棄地つてヤツだ。
それじゃよくなない。おまけに一説によると都會の空氣は汚いらしく」

「うへへ

「色とかついてるンかね」

「色はついてないと思うけど、川とかあんまりきれいじゃないね」

「そーか、じゃ俺は住めないな、俺はきれいな環境にしか生息しな
い」

「なんてショーンボリー、みたいなリアクションを取つてがつかりす
るおじいちゃん。

「で、どうするよ、何しますかい?」

「じゃあ烟行いく!」

「烟行つて何するんだよ?」

「収穫する!」

「何を?」

「何か!」

「解つた、OK、よしきた、じいちゃんが何か適当にソレっぽいモノ
ノ収穫させてやる!」

「うつしゃー!」

「私と姉は一度家へと駆け込み、父と母へ「収穫行つてくる!」と
それだけを告げておじいちゃんの軽トラへと乗り込んだ。

いつもは危ないからと乗せてもらえない荷台だつたけど、今回は
二人とも大きくなつたし、と特別に乗せてもらつことができた。
たつたそれだけのことなのに、その当時は押さえられないくらい

のワクワク感で胸がいっぱいになり、先ほどのひみつと心配や不安感などもどこ吹く風に清算している私がいる。

日常の少しの機微がこれほどまでに喜びとなっていた日々。木漏れ日と日差しの繰り返す山道を真夏の風に吹かれながら、私は何ら意図を持つことなく笑うことが出来たのだった。

さしてぐるまで行く必要のない距離を走り、村はずれにあるおじいちゃんの畠へと軽トラは向かっていった。

途中、どこかで見たことがあるような村の人がある人は親しげに、ある人は避けるよつな視線で私たちを見ていた。

「おじいちゃん？」

「んだよー」

「何とるのー」

「とおいー、危ないから立つなよ、あー、あれだ、トマトだ。夏と言えばトマトだろ」「うおお、赤い？」

「んー、赤い、赤い、時々青い」

「青いの？」

「青いつちゅうか縁だ」

「へえー」

ガゴガゴガゴ、砂利で覆われた道を軽トラがのろのろと走り、その荷台で私たちはガゴガゴと揺れていた。

「青いトマト見たことないんか？」

「うんー、あんまり記憶にはない」

「んー、そーゆーモンなんだなあ

「みたいですねえ」

「うおーし、ついたぞー、二人とも荷台のかご取つてくるんだ」

「あいさー」

「どのかごー？」

「んあー、持てるヤツなら何でも良いさ、こいつち来てみろ」ソコには都会では見なくなつて久しい烟が広がつていた。

茶色い地肌から伸びる青々とした野菜野菜野菜。

正直の所私にはどの葉がいつたにどの野菜なのか、その見当すらつかないのだが、それでも私の知つてゐる野菜のほとんどがソコに植わつてゐるような、ソシな大きな烟だつた。

「おふあー！」

「広いね」

「ああ、俺の烟だ。当然広い」

「成る程納得」

「んじや、トマトはこいつちだ。ほら、赤いヤツもうとつちまえ」三畝ほどに並んでいるトマト、赤いモノからまだ青いモノ、大きいモノから小さいモノ、全てが違つ色形で、全てがどこか不格好。お店に並ぶモノとはまた違つ、くすんだ色で、でこぼこしてて、だけどどこか愛嬌があつた。

「あつちは？」

「あつちはあれだー、あー、たぶんサツマイモ

「へえ」

「サツマイモはなー、まだそれねえんだよなあ、わりーけどよ、芋掘り面白いくけどな」

「んー」

「あは、これ割れてるね、虫？」

「んにゃ、あーとな、水つ氣多いとモーなつちまうんだ。んじやあ、

「「はしちゅと頼むぞう、ここのハサミ使つて、まあ、取りすぎない程度に」

「了解じゃー、おじこちやんは？」

「じいちゃんはアレだ、別のモノ取つてくる」

「ナニナニ？」

「秘密だ」

「けち」

「後で教えてやるよー」

「んー、うん、解った」

「つまーし、ではトマト収穫開始イー！」

「じゅー！」

私たちはトマトの森へとかけだした。

田がゆづくりと傾いて、周囲があかね色に輝いて、それに答えるように煙の草木もその色を変えていく。

なんだか自然と蝉の声も鳴き疲れたようを感じじられ、くたびれた山村全体にちよつとした哀愁を醸し出したりする。

「つまし、帰るかー」

「あれ、おじいちゃんいつからいたの」

「えはは、ひょっと前から、ちゃんと仕事をしてたが見ていたのだよ

「のぞめー」

「つまーし、のぞめ違つ、違つ」

「覗きー」

「ぎあはは」

カゴは私たちでは持ち上げられないぐらいのトマトでいっぱいになつていて。

おじいちゃんはソレを軽々と持ち上げ、車へと積み込むエンジンをかけた。

「どだ、楽しかったか、収穫」

「うん、途中で飽きてきたけどー！」

「だらうだらう、だけどよく頑張ったなア」

「それはねえー」

「ん、頼まれましたからー」

「おう、さすがだな」

そしておじいちゃんは私と姉さんの頭をぐづぐづと撫で、よいでと背筋を大きくのばした。

「ねえ、おじこちゃん？」

そこに服を引っ張りながら姉が訪ねる。

「なんだう？」

「お爺ちゃんのトマトって何でみんな形が違うの？」

「んむ、そうか、そうだな」

「スーパーのはみんな同じ形している」

「まあ、じこちゃんのは売りモンじゃないからなあ、売るためにつ
くつてんのは綺麗じやないと買ってもらえないからよ、桜は綺麗な
トマトの方がいいか？」

「そう言われ、しばし黙り込む、といつか考え込む姉。

「どうだう？」

「どうかね」「どうかね」

「綺麗なのもいいけど、みんな違うのもいいかも」

「懐かしいな」

「何が？」

「みんなちがつてみんないって、そこのヤツだ。昔の詩か何か
でな、じこちゃんが若い頃のだ」

「へえ……」

「まああー、俺もみんな違う方が好きかもなア」

「何でー？」

「そっちの方が可愛いんじゃねーかなあ、みんな同じじゅべーが良
いんかわからねーもんな

「おお、成る程」

「でも、でもさつ

お姉ちゃんが声を張った。

「何？」

「それじゃあや……私トマト食べれないよ

不思議そうな顔をするおじこちゃん。

「何でだよ？」

「だって、や、同じのがいるなら良いけど、同じのがいないなら

食べちやだめだよ

「お姉ちゃん？」

「みんな良いなら、代わりなんてないもん、それじゃ可哀想だよ…

…」

と、姉はか細く寂しげに、ほき出すよつこじて告げた。

私はそのときのおじいちゃんの顔を今でも忘れることはできない。ひどく困惑したよつでもあり、そしてそれ以上に、この上なく悲しい顔をしていた。

ただでさえ皺だらけのその顔に、さらに深い皺をぎゅっと刻み込み。

小さくムセ込み、そうして言葉を選ぶよつに話を続けた。

「ああ、まあ、そつかもなア……」

「そうだよね？」

「んー」

今の私は、トマトが可哀想などと云ひのせおかしいと、そう考える多くの人を知っている。

当時の私は、あまり深く考へることではなく、可哀想なら可哀想なのだろうと、直接的に受け止めていた。

そしてたぶん、今の私もまた、トマトが可哀想などと云ひのはおかしいと、そう考えるうちの一人だろう。

たぶん姉だつて、そうだ。

「まあ、でも食べてもらつのもトマトの仕事だつよ、少なくとも人間はそのためにトマト育ててんだ、もちろん、それが人間勝手な考へだつてことはわかつてるけどよ」

おじいちゃんは、どう思つていたのかな。

今となつてはわからないけど、それでもおじいちゃんは、そんなおかしなことを云ひつな、と姉をとがめるようなことは決してなかつた。

「じゃあ、私は綺麗なトマトが良い」

姉は。

「みんな同じで、みんな綺麗なトマトなり、こくらくなくなつても
変わらないもん、だからそつちが良い、そつちが良いよ
優しい人なんだろうか。

「そうだなあ、じこちやんのトマトは可哀想なトマトになつたまつ
なあ」

「違うよ」

「んう?」

「お爺ちやこのは可愛ニトマトだな

「おお、おうか……」

「そうだよ」

「なんだかウレシイよなあ

「どういたしまして」

やうしておじちゃんはもう一回、あの私が好きな笑顔で笑つてくれ
れていた。

「そういえば、おじこちやん」

「なんだよ?」

家の中へとトマトを運び込みながら、私はおじこちやんに尋ねた。

「おじこちやんは何をとつてきたの?..」

「ああ、やうか、そうだよなあ」

「なにー」

「ほりあ、ひれ

」 そういふとおじこちやんは、荷台に載せられた小さなカゴを指さ
した。

「わあ、虫ー!」

「ええ、ちゅうどーー!..」

「まあまあ、跳んだりはねたりはしねえからよ

」 と言つておじこちやんが取り出したのは蟬の幼虫。

茶色いそいつらはキロキロとした動きで虫籠の中を歩こんだ。

「ほら、触れるか？」

「あたしは大じょぶ！ 姉ちゃんはダメ！」

「わ、私だって大丈夫だって！ ほらー ほらー」

「わ、わ、わ」

「じゃあソレを、そこだ、網戸につけるんだ。ほれ、下の方に」

「あ、上つてる」

「うん」

「今まで上つてくるのを待つんだ」

「待つたら？」

「下まで戻す」

「ヒドい」

「ひじくなんかねえよー、ヒツヤツヒヤツになる場所を決めてんだよ、ちゅうひどい良い場所を見つけたら落ち着くんだ」

「ふえあ、見れるの！？ ヤミになるとこー！」

「ああ、早起きすればな

「わたしする！」

「え、あ、じゃ私もー！」

そうして私たちが話している間も、このヤミの幼虫たちが、ゆっくつとゆっくりと網戸を上つていぐ。

透き通る羽を広げるために、そうして窓へと飛び立つため。ほんのわずかな命を謳歌するため。

ヤミたちにとってはソレが唯一の生きる手段なのだから。

「ねえちやん、起きて！ 朝だよー！」
「朝じゃない……まだ真っ暗」
「朝だよー やみ見れないよー？」
「んー……」

「があ、だつ、もつ！ しりん…」

「うえー」

よつやく姉を引きずり出し、表へと出て行くと、やいじますでこそじこちゃんが待っていた。

「セミー、どう？」

「おお、これこれ」

そこには、白いセミがいた。

茶色い背中にできた亀裂から、ソレは垂れ下がるよつて地面を向いていて。

ただの虫ではない、透き通るよつた輝きに、青、緑、赤、うつすらとした色合いか、まるで陶器の模様のよつて浮き上がつて見えた。「なはー、見てよー、これ、見てよー。」

「おう、見てるよ、見てるつて」

「ほり、お姉ちゃんもー。」

「うん、見てるよ」

そうしてゆつくりと、彼らは羽を広げていぐ。

皺だらけだつたソレは、次第に光を帶びて、色を帶びていぐ。

「あれ、こいつ…」

「羽…シワシワなままだね…」

「匹、羽が伸びない。」

「おじこちゃん、こいつ…」

「ああ、そつか…」

「それ以上おじこちゃんは何も言わなくて、私たちも何も言ひ」と

ができなかつた。

「ダメ？」

「ダメかもなあ…」

「そつか」

「生き物だからな、こいつ」ともある

「生き物だから？」

「生きてるんだからな、人間ぐらいだよお、例外は」

「やうなんだ」

「ああ」

「人間つてすゞい？」

「俺にゃ一わからん」

「やうか……」

「へへ、どしたよ？」

「別にどいつも、生きのつて大変だなあつて」

「おいおい、若者が何こいつちよるんだい、おめーらはコレからだ、コレからだ」

彼らの羽はゆっくつと、透き通る純白から見慣れた茶色へと変わつていく。

無垢な色を捨てて、真夏の空でも羽ばたけるよつて、強く堅い羽を手に入れる。

「俺はもつ、そつとくないからな、後はもつ、おまえたちの番だろつよ」

ゆつくつと空が白んでくる。

そうしてそのつむぎ一匹が大空に向かい羽を羽ばたかせた。

「とんだ……」

「だなあー」

「ダイジョブかな……」

「なあに、大丈夫だろつよ、それなりにやつてつりや死にやせん」

「セミが？」

「別に、セミだけじゃなーのがなあ」

「そつか」

「そーだよつ、飛べ、ほら、飛ぶんだ！」

「おつ、飛べ！」

「お前もだよー！」

「あたしもかー！」

「おつ」

「つああーー 何だかひ、すいへんしこ

「うぎはは、小梅は大変だな、笑つたり悲しんだりよオ！」

「子どもだって大変なんです」

「だな！ まあ、あれだ、綺麗なところはもうおしまいだ。桜も、あんまり寝てねえだろうに、昼間起きてらんなくなんぞ」

「うん、だけど私はもう少し見てたいな」

「んおーう、小梅は？」

「あつしもー」

「そりが、おう、そりが」

「うんー」

それから数年後の夏。

私のおじいちゃん、春川善治郎は呆氣なく亡くなってしまった。あの日のような真夏の日差し、あの日のような赤く熟れたトマトの中でのたつた一人のおじいちゃんは帰らぬ人となつた。

結局あの後も、おじいちゃんは私たちの所に来るようになるべく、あの村に残り続けた。

だからではないけど、誰かが一緒におじいちゃんの所にいれば、おじいちゃんはもう少し長生きできたのかもしれない、心の中で思つ日々が続いていた。

もつとも、そんなことをおじいちゃんが認めるとは思えないけど。私にとってのおじいちゃんとは、おそらくその人生の間で出会つたもつともカツコイイ人間であろう。

それほどまでにルールを持たない、自分のルールを曲げない人間を私は今後の人生で目の当たりにすることは無かつた。

正直私には、あこがれるような人物が多くすぎるような気がする。だけど私はそのダレにも似ていらない。

だから私は、私が好きなのかもしれないけど。

それは全てが始まる前の、私がまだ子供の頃のお話。
まだ大人になる前の夏。

まだ子供でいられた頃の夏。

今はただ、キラキラと輝いて、
この先に待つ、日々のために。

笑い疲れ、ゆっくりと眠ろう。

ハルカワコウメイ

たくさん季節が過ぎて、そしてまた夏が来た。

そしてその夏もおしまい、今はただ熱気だけがあつい、あつい。私もまた季節と共にたくさんの年月を過ごし、そうしてゆっくりと大人になっていき、そしてあつという間に多くを失った。

今、私の目の前で、あの自殺アパートが取り壊されようとしている。

楽しい思い出、つらい思い出で、忘れることの出来ない私の人生最大のモニメントが、数日前よりゆっくりと取り壊されて行っている。

それはそう、ゆっくりと死んでいく私のように見える。

鉄骨を切り取られ、崩れ落ちていく私のように。

今はもう、涙も出ない。

泣く必要も、無いのかもしれない。

だから私は仕方なく笑っているしかないのだ。

季節の終わり、夏の終わり、死んでしまった世界の中で、私はただ笑っているしかないのだ。

「なんだかなーって思つよ」

「何が?」

「やあ、なんだかね、なんだか解らないんだけど、ちょうどなんだかなって感じ」

「やりきれない?」

「何が?」

「何がでもないだろ?」

「まあ、そうかもしだんケド」

「……大丈夫か?」

「何がさ」

「何もかもだよ、次やつたら今度は俺が殺すぞ?」

「やあ、物騒ね」

「勘弁してくれよ、本当に」

「先生がいるなら、大丈夫なんでしょうや?」

「まあな

そういうて彼は足を組み直し、ふうと、ため息を漏り出す。

「疲れてる?」

「まあ、最近は誰も彼も病んじまって、おかげで俺は大もうけさせんせー、あんまし嬉そーじゃないね」

「まあー……なあー」

「うはは

「あー、あれだ、お茶、おかわりいる?」

そういうて先生は立ち上がりポットに手をかけるが、私はそれをピシャと止めた。

「やあ、いいです、もう今日は、早めに帰りますんで、お姉ちゃんもそのまんまやし

「あれ、そう?」

「はイ」

そして先生は自分のカップにだけ紅茶を入れ、すうと喉に通し、しかめた顔をする。

「ちよいと苦かった」

「あはは」

「あー、あれだ」

「ねえ、先生?」

「あー、まあいいか、ハイ……なんでしょう?」

「私たちの部屋も、そろそろ潰されちゃうんですけど」

「ん、そつか……あー、もう、そつか、半年になるか

「ですね、6ヶ月と、20です」

「ああん、そつか、ん……」

「ああ、やあ、ソンな顔しないでくださいよ、良いんですよ、あのあと遺書も見つけましたし、流石にまだ生きるとも思ってませんから、だから、もう良いんです。ただ……」

「ただ?」

「いえ、タダ、思い出すとすると」とダケはやめられなくて、つらいし、たぶん思い出せない方が良いとは思つんですけど、それでも自分でナニかが自然と整理しあうと思つて出ししゃうんです

「そうか、まあ、そうだよなあ」

先生は少しうなるように顔を伏せ、やがてつぶやいた。

「まあ、コレは、あまり聞かなかつたことにしてもいい

「んえ?」

「俺はまあ、気にしないよることも盡つとも出来ないわけで、キミの場合は、俺はそれでも良いと思つ」

「……?」

「キミの場合はナットクするまで、気になった方が良いのかも知れないって思う、コレは先生としてと言うか、どっちかというと個人的な考え方だけど、その方がキミは前に進めるし、タブン今までそうやって生きてきたんじゃないかつてー、あー、そう思つ

「んふふ

「おかしいっすか」

私は口元を押さえ、ちょっと手を振つて見せた。

「いえー、別に、何でもないです」

と、それだけを返します。

なら笑うなよ、と、先生は大げさに肩をくめた先生は。

「焦るなよ」

と、ただ一言だけ私に告げた。

「ただいまー」

新しく借りたアパートの一室、かつての家は既にもうない。

「んー」

「お姉ちゃん、帰ったよ?」

「うん……」

廊下にカラダを放り出した姉は、タダ一言もつぶやいて顔を伏せた。

「おねえーちゃん」

「んー」

「寝るなら、フトンでいい、ねえ」

「ん」

「ほり、立つて。お布団までこい?」

「……」

「あー……ちくしょー」

私は押し入れから掛け布団を引き出し、姉のカラダにかけた。

姉はカラダをよじり、ソレをよそへとやつた。

部屋の照明は消され、テーブルの上には用意しておいた夕飯が手つかずのまま残っている。

私は余り物に少しだけ口をつけ、胃の痛みに耐えきれずに箸を置いた。

「だふう」

部屋は、汚れていた。

片付ける時間もあまりなく、片付けても姉が散らかしてしまう。いつの間にかソレになれていて、片付けようと想つことも減つていた。

それじゃ駄目だとは思うのだけど、そういうこともなにやら疲れるようになつてきている。

仕事場は後がなく、サービス残業は連日続く。

社長の人柄に助けられているようなモノで、私のようなお荷物相手には安月給を払うにも気が引けるだろう。誰だつてソレは知つている。

ああ、私だつて、知つている。

なんだか、カラダが重い。

お風呂に入る気もわかない。

おかしいなあ、と思うのだけど、何がおかしいのかは私には理解できない。

私は何をするでもなく、少しだけ部屋の中をうろついて、そして何もすることができずつづくまたた。

「お姉ちゃん？」

「ん」

「……………私、明日も早くから寝るね？」

「ん」

「もう寒くなつてきたり、風邪引くよ？」

「……………ん」

「かーぜつ、ひくよ？」

「……………」

私は廊下にフトンを引き。

そして姉を引きずりそこに横たえた。

姉は、いやがつた。

「ほら、寒いとダメだよ？ ね、お休み、ね？」

「……………」

「ね？」

「こつめ」

「……………なあに？」

「じめん」

「うん……ん」

電気を消してフトンに入る。

どうしてか、体は少しも温かくない。

真夜中に物音がした。

部屋の明かりはついていて、姉が台所に立っていた。

「小梅、おはよう?」「

「あ、うん? おはよう!」

「うん」

「何やつてるの」

「……お料理?」

「朝ご飯?」

「うん」

「手伝おつか」

「いい」

「……そう?」「

「小梅は、学校早いからね、遅刻しないよ!」「

「……ありがとうね」

「お父さんも、会社大変だよ」

「うん」

「お母さんも……」

そこまで言つて姉は手を止めた。

その先に続く言葉が、解らないのかそれとも言えないのか。突つ立つたままの姉を見て、私は我慢することができなかつた。

「お、姉ちゃん……」

「小梅、なに?」「

「もう……みんな、いないから」

「あれ?」

「いないんだつて」

「お父さん達の分つくれないと……」

「だ、からッ!」

私はそこまで言つて、それ以上言つのをやめた。
続けることが出来なかつた。

「私は、私はもう……学校は行つてないから、大丈夫だよ?」「

「……」

「だから、手伝うから、一緒につくれ?……お父さん達、大変だ

もんね

「ん」

そして包丁を握る。

お母さんも、お父さんも、みんなって、
口に出すのが怖かつたのか、確認するのが嫌だつたのか。

私は黙つて、包丁を握つていた。

「小梅？」

「あ、うん」

「大丈夫？ 疲れてない？」

「ダイジョブ、向こうでやつてるね、台所に狭いし」

「うん」

どうしてこんなコトになつてしまつたのだろう。
途中まではうまくいっていたよね。

誰に確認するでもなく、私はそうつぶやいて、そして自問した。
答えは出ない、ソコにあるのはいつもの何だかなあ、と言う感覺
だけ。

おかしいなあといつ思ひだけ。
つまりは何もないようなモノ。

「お姉ちゃん」

「何？」

「……あー、ごめん、何でもない」

私の中にふと浮かんでいた考えは、自分でも繰り返すコトが出来
ないほど恐ろしいことだった。

そしてそれは、自分でも、それが本当に自分だったのかも解らな
い。

トッ、トッ、トッと包丁がまな板をたたく音だけが私の耳に届い
て、なんだか次第に意識が薄れていくようで、自分が自分を保てな
いようで怖い。

少しの間ぼつとしていた私は、繰り返される包丁の音を頭の中で
反復し、なんだか私の心や精神とかそんな物みんなが。

細切れにされてグチャグチャに混ぜられていくよつな、そんな感じがした。

「小梅……？」

突つ立つたままの私を不思議に思ったのか、姉は私にそっと問いかけ私を椅子に座らせた。

「あ、大丈夫？」

「うん……ん」

「やつぱり、休んでてよ、ね？」

「そう、そうだね」

「無茶しちゃダメだよ」

「うん」

私は包丁を握ったままだつた。

きつく握りしめて、指が痛くなりそうな程に握りしめて、私は何かが流れ出そうとするのを押させていた。

逃げ出したくて、逃げ出したくて。

そんなこと考えても何も解決しないのだけど。

私は終わりを作りたかった。

「ねえ」

「何？」

「お姉ちゃん」

「……ん？」

「……ゴメン」

私は腕を振り上げた。

高く、高く。

刃は蛍光灯の光を反射して、とても控えめにその光を送り返していく。

ためらつ前に、苦しむ前に、ひと思いに。

悲しみの前に、全てに終わりを。

振り下ろした手には重い感覚が。

目の前には赤い風景が。

そしてわずかながらの開放感が私の全てを支配した。

「お姉ちゃん……」

ゴトリと重い音をたて、私のカラダは力を失つたまま床へと倒れ込んだ。

強く打つた体も、頭も、もはや何かを感じる余裕はビリにもなかつた。

「あえ、」「うめ？」

「あ、ぎ、うへ……」「

なんだか疲れてしまった。

「あれ、なんで、よ」

「うん……へへ、あ、ぶ

視界がぼやけてきた。

カラダが自分のモノじゃないみたいな感覚。

なんか、少し面白かった。

「ひつ、ぎつ」

血が、出た。

「お姉ちゃんつ」

「な、に」

「お。ねえちゃんつ！」

もう、それつきり何も見えなかつた。

今はゆっくりと眠ろう。

次の日々は、もうないのかも知れないけど。

私はその屋上で私がかつて過ごしていた町並みを眺めていた。

迷いはなく、後戻りする気もない。

いつだって一人の私には今も昔もここから見えるモノだけが全て

だつた。

だから、人生の最後はその全てが見える口で迎えたいと思つて
いた。

「なんもなかつたなあ」

自然と自嘲的な笑いだけがこぼれ、それっきり私は何も出来ずに
いる。

踏み出しへ踏みとどまつてを繰り返し、余計な考えを振りほど
こうとするほどにその考えに絡め取られていくような気がした。
それなりの決心はしてきたつもりだったがいやそれの段階になつて
みればわき上がりてくるのは恐怖心ばかり。

そんな自分にじれつたあと、ほんの少しの愛着のよつなモノを感
じ余計にそれを捨てることをとどまつてしまつ。
子供の頃から、変わらない私。

「ばかじょんねえ」

誰にとでもなく話しかける私。
当然返事など帰つてこない。

それとも私は、まだ誰かに助けてほしいのか。
いつまでも悲劇のヒロイン小梅けやんを演じているつもりなのか
……。

私は、ヒロインでも何でもない。

世界の片隅でこつそつと消えていくだけの存在だと呟いていた
づくまでどれだけの時間と犠牲を払つたか。
何を失つてまで手に入れた現実がコレなのか。
私はそのことを思い出し。

そして、この世から消えるための決心をつけた。

「よし、行ける」

風の音がする。

手すりを乗り越えた私に、共に消えんとする夏の名残がそつとほ
ほを撫でた。

それはまるで、一緒に死んでくれるの？ と問いかけてくるよう

後は手を離せば私のカラダはそのまま地面へと落ちてこぐ。

「お、死ぬのか」

あいつの顔が見えた気がした。

「ふあ……」

なんだか自然と涙がこぼれてきて、なんだか自然と誰にでもなく謝っていた。

「こめん、やつぱりダメだったよ私」

なんだそりやつじ。

「ホントに」「めん」

あの女は私のことを馬鹿にするだろつか。

「でももういいんだ。コレで全部終わりだもん、みんなのトーロ、行けるのかな?」

そういうて私は瞳を閉じて、深呼吸をした。

やはり風は気持ちいい。

どんなときであっても、ココだけは私に優しくしてくれた気がする。

「だあ、ちくしょ、待てやオイ!」

がんがんがんと、階段を駆け上る音がする。

誰かと思って振り向くと、そこには見慣れた男がいた。

「牛久せんせ……でも、なんで?」

「だあ、も、しるか、なんでもなんもあるかよ?」

「だつて」

「良いからつ、こっち来い、落ちんなよ」

「無理だつて」

「なんで」

「無理だから、ココここなんだから」

「だからつ」

「来ないで、 来たら、 落ちるから」

「あー」

「来ないでエー！」

私は声を荒げて先生を追い捨つただけで、 それでも先生は近づいてくる。

そして何故か私は飛び降りることが出来ずについた。

「なんですよ、 なんでそやつて私をバカにするの？ 助けになんて来られたら、 私は飛べないつて解つてゐるのに、 何でそういう口をするの？」

「バカ、 解つてんからするんだろ？」

「何で！ 助けてほしい時には誰も助けてくれないんだよ！ 何で死のうとするときになつて助けに来るの！」

先生は私を抱き寄せるようにして押さえつけた。

なんだか懐かしさすら感じじるこの姿。

いつかの私たちを思いだすようなその姿。

反射的にぽろぽろといゝまれ落ちた涙は、 邙か下へと落ちて見えなくなつた。

「なら死ねよ」

「え？」

「助けてほしくて死のうとするヤツなんて、 さつさと死んでしまえ」
そういうつて私を力強く抑えつける先生。

ソレは心地よく暖かい。

情けなくなるほどに、 生きてる喜びを感じさせた。

「ホントに死にそつたヤツを助けないで、 他に誰を助ければ良いんだよ俺は……小梅、 もつやめてくれよ」

「あ……『じめん……』

「戻ろうな

「ん……」

先ほどまでの感覚が嘘のようこ、 頬をなでる風がイヤに冷たく感じる。

まるでこの風景が、初めて私を敵と見なしたように。

早く死ねよ、早く死ねよとはやし立て、私に冷たく当たつてくる。
実際には、私を取り巻く世界の多くなんてなんら変わっていない
ハズなのに。

ほんのちょっとした感情の機微や、そのときの気分なんかで世界
なんて全く変わってしまうのだから。

ソシな世界の中で、私は辛く苦しんでこる。

いつまでも弱い自分を崇めるだけの悲劇のヒロインを演じている。
敵がないと不安になつて。

いじめられているんだから助けてもらえたと思って。

私は生きている限りかわいそうな小梅ちゃんのまま一生を過ごす。
そしてソレを、どこか心の底で望んでいる。

いくら死のうとしている人を助けても、助けられた時点でのイメ
リは変わってしまうから。

私は抜け出せなかつた。

いくら先生が暖かくとも。

いくら世界が優しくとも。

夏の終わり、私の終幕もいすれやつてくれる。

「また、飛べなかつたなあ」

私はつぶやきながらアパートを後にする。

いつかと同じつぶやきを残し。

「悔しいなあ」

いつもとは違つつぶやきも残して。

世界は何事もなくいつも通りだが、私はこの夏に蝉の声を一度も
聞いていない。

もしかしたら、この世界は私たちのような生命が生きるには、厳
しそぎるのもしれない。

その思いがまた、弱すぎる自分をいつそう嫌いにさせた。

ハルカワコウメ g

季節は変わり秋になる。

残暑も息を潜め、木々も少しずつ秋色に染まっていく。

夏休みは終わり、また^{鬱々}とした学校生活が始まるのだけど。

秋はいろいろと行事も多く、勉強はないけどみんなで学校、みた
いなそんな空気は嫌いではない。

文化祭が近づき、いつもとは違う学校の活気。

なんだかワクワクしてくるのだけど、そのワクワクをフルに活用
できないのも私だった。

「でよー、ほんじょせーん

「ういうい？」

「なんつか、秋ですね」

「まあー、なあ、秋だなあ

「なんかいつの間にか寒くなつてきてて

「だなあ

「この前なんか風呂上がりパンイチでいたら風邪引きやつになつて

「それはさあ、俺に言うなよ

「まあ、ですかね」

美術部の部室で本城氏と二人。

特にやることもなく、特に目的もなく、のんべんだらりと過ごす
放課後の部活動時間帯。

活動時間なのに、部室にいるのは私たちだけで、つまりは今暇な
のは私たちだけと言つコトなのかもしれない。

手持ちぶさたにペンを回しながら、私はここ数日もやめやと抱え
ていたコトを提出してみる。

「なんでしょうかー、あれですよ

「ですか」

「だから、あたしらもなんかやらないんですかねー、文化祭」

「あたしらって、美術部でか?」

「んーんー」

「でもさー何かとか言われてもなあ、お前だつてクラスの出し物だつてあるだろ?」

「まあ、そりだけどー」

「そもそも、部活の出し物申し込み期限過ぎちゃつてぬし」

「あー、マジなのか?」

「まじまじ」

「なんでい、つまらん」

私はだらだらとテーブルに突つ伏しておんぼうなそいつの脚をガツガツと蹴る。

まあ、たとえ申請が通つてもなんだかんだで途中で投げ出しそうな気がしないでもないが。

多少は意を決して言つたことなので面白くない。

そもそもさあ、出し物するつても何をするワケよ?」

「えー、何だろね?」

「展示とか? 美術部だし」

「あたし今年入つてから一枚も描いてないよ」

「マジか」

「あんたは?」

「ゼロつす」

「ですよね……」

「まあ、そんなモンだよ」

「なんつか、私らつて何もしてないんだなあー」

大きく開けられた窓から秋の風が入り込んでくる。

おお、コレつてもつと頑張らなきゃ行けないんじやなかろうか。校門に備え付けられた巨大な看板が、なんだかちょっと私を焦ら

せていた。

「ほんじょー」

「何?」

「Jの後あんた予定ある?」

「ないな、珍しく」

「はいはい」

「で、なにさ」

「あれだ、作戦会議」

「なんのよ」

「わかんない、ケド、とりあえず作戦立てておく」

「あ、作戦すか、場所は」

「アタシん家で」

文化祭まであと一日、ぶっちゃけ私は暇な自分が嫌だった。
ひとたび忙しくなれば愚痴ばかりだが、それでも何か、頑張つて
る奴らを直視できるぐらいの何かしている感が欲しかった。
引け目かも知れない、ただ、この劣等感すらも感じなくなれば私
は本格的にダメになる。

それだけは妙に確信があった。

「あれだ、青春会議にする」

「青春会議?」

「そう、熱き魂と、やる気と、ガングリズムとか総動員して、なん
かさ、そんなの」

「んー、見えてこんな」

「そう、なんかそうだよ、見えないの、大切なことは
「そつなのか」

部員はたくさんいるハズのこの部だけど。

知ってる人などその半分いるかいなかつたりで。

そんなのつてアレじゅん、青春していないというか、やつぱりアレ
だから。

何でも良いのでガムシャラに、何も見えなくても良いから、何の

成果もなくて良いから、そんな感じです。

「ただいま

「おじやまーす」

「おはおー、いらっしゃーいーっ」

帰宅と同時になんかハイテンションな姉がいた。

「あれ、何かいる、どしたの」

「誰?」

「あーいや、姉」

「へえ」

「なぜアタシを見る」

「別に」

「でえ、大学は?」

「あー、んー、まあね! サボつてきたヨー。」

「良いのか」

「大学つてそんなモンよ」

「へえ」

「で、サボつて何してんの?」

「あー、いやあ、ねえ?」

なんて急に元気がなくなつてくる。

「おーい、ダイジョブかー?」

「あーんー」

私の姉というのは妙にわかりやすい生き物であつて、何かひどく落ち込んでいる時ほど無理矢理テンションをあげる傾向にある。

帰ってきたときから妙にそんな予感はしていたのだけど、たぶんきっと、やうなんだと思つ。

「どうどうどう?」

「だいじょぶスカ」

「あー、ちょー、もう、あんまり私を哀れむなよつー。」

「えー、そりゃないよ」

「あーもー、だつあもつた！ ちよう、少年少女達、暇か！？」

「これから青春会議が」

「何だよソレ！」

「なんだっけ？」

「や、だから熱と汗と、あー、やる気とかの会議、アタシ議長

「じゃあそれ中止」

「え、勝手に！？」

「おう！」

「まあいいけど、どうすんの？」

「いや、良いのかよ、お前言い出したの！」

「酒を持って！」

「はあ？」

「飲み行くぞ！ アタシ持ちだからー。」

「えー、んー」

なんかそれで良いのかと思わなくもないけど、それで良いような

氣もした。

元々目的何て無いのだから、何かやることが出来ただけでも良いのかも知れない。

それにちょっと、憧れでもないけど、酒を飲んでワイワイする未成年つてのも、なにやらちょっと青春チック。

私のような引っ越し思案にはまたとないチャンスのようにも見えて、なんだかそれは少し魅力的。

さあ酒だ、なんて姉も本格的な大学生だな、とか、ちょっとそんな気がした。

「俺たち、まだ未成年なんですけど」

「ンなコト知ってるよ、大学は入りや未成年でも飲むんだよ

「んー、まあ、良いんでねえ」

「うえ、議長、それでいいんすか？」

「うん、議長の名において命ずる」

「マジですか」

「うん、酒飲みながら会議すればいいじゃん」

「議長、それ社会出てから言っちゃダメだよ」

「うん、言ってからそう思った」

結局の所、外の飲み屋とかはさすがにマズいこといけないになり、姉の持ち込みによる桜ちゃんを慰める余が開かれることになった。

「あー、まお？」

「うん、携帯にそれ以外出たら怖いだろ」

「だな。まあ、ンなこたどうでもいい、なあつけで飲みこねえ？」

「おう、いくいくー」

「なんか軽いなー」

「誰か他にも連れてく？ 今てこりゃんと明智選てるナビ」「明智？」

「えーと、あれだ、あの、あー、ひつひちーのー」

「ああ、解った、まあどっちでもいいや姉持ちだから」

「へえ、ご馳走様です。まあ、いいや、適当に見繕つてくよ」

「おう、待ってるかひ」

「ふつん。

折角なので友達とか集めてみよつとこいつ展開で、まおからはあつさつと参加の意思表示が帰ってきた。

「どだつて？」

「ん、今から来るつてさー」

「そつかそつか、あいつ結構飲むぞ」

「そなの？」

「んー、演劇部つて結構アレな所もあつからなあ」

「へえー、意外」

「俺も意外だつた」

なんだか人それぞれ、私の知らない部分も結構あるモノだと今更になつて思う。

知つた気になつているとそれは余計に大きい。

解つた氣でいるとショックも多少アル。

「あんたは？」

「俺？」

「んー」

「おりやー、そりや、飲めねーよ」

「お、そりやまた意外だな」

「まあ、そんなモンだろ」

「とー、ゆーかみんな結構飲んでるんだね」

「小梅は飲んだことないん？」

「ないね、ないのか」

「まあ、何事も経験、経験」

「うん」

「何か、若いのは楽しそうだねえ」

「どしたよ年寄り」

「何でもねーよー、もー」

一番飲みたがっていた人間は、なにやら妙にしょぼくれていた。
さて、あたしは、飲めるのか。
飲めないのか。

おお、何かこれってどきどきする。

無知な私にしてみれば、お酒とは魔法の飲み物に近い。
もつとも飲み慣れた人間にしてもそれは元気の出る魔法の薬なの
かも知れないけれど。

そしてまた一方で、ホントにお酒とはそんな良いモノのかつて
言つ疑問というか、お仕事で疲れてへろへろの父にして、生きてて
良かつたと言わせるほどの力がこの液体にあるのだろうか。

そんな半ば半信半疑、そして半ば純粹な期待を抱きつつ。私はアルミと書かれたソノ缶を穴が開きそつまでに見つめていた。

「そんな見たら、かわいそやろ」「うえ」

「どしたん?」

「いや、ちょっとトリップしてた
やっぱリアルゴールが良いのだろうか。

アルコールランプは使ったことがあるが、それと何が違うのか。

「てんこちゃんはぞ」

「なんよ?」

「お酒飲んだことあるん?」

「うんー、ないなー」

「え……ないの?」

「うん、え、だつてあれやん、未成年やし」

「うん、そのはずなのに、その筈なのにねえ?」

「どしたよ、さつきから拳動不審だな」

「わあ、もうなんだ、お前達法律守れよー。」

まあ、いいか。

我が家には私や桜姉さん、まあ、てんこちゃん、本城氏、ついでにみそつかすの明智君も集まり、祝うこともないのにパーティー気分。

何もしてないのに何か楽しつってカンジ。

いいじやん、何かイイじやん。

「それじやあ、まあ、第一回青春会議を開催いたしまーす」

「あ、乗つ取られたつ?」

「なあ、うつさいな、後で話聞いてあげるから」

「うへへ、そんじや、ご馳走になりますー」

「なあ、もう、いいよいよ、好きにしりょー、てか、誰かアタシをなぐさめてよー」

「ウメちゃんはお酒飲んだ」とあんの?」

「や、眞無、故にちようドキドキします」

「おお、じゃお互い初体験か、まあ、そんな大それたコトじゃないけどねえ」

「ですね」

見ているだけでは何だものね、私は緑色の缶チューハイを手にとつてそいつをてんこちゃんに持たせる。タブを引っ張り、カキヨツと音を響かせて、ちよつとしたお酒の臭いが広がる気がした。

「では、乾杯」

「ども、かんぱい」

ごんつと、鈍い音が返ってきて、少しばかり「じぼし」。

私たちは顔を見合わせ、チョットあわてて、そしてなんだか笑つて。

「よし、飲むぞ!」

「おお、わあわ!」

「よしー!」

「うん」

「あー、もー!」

「ん?」

「一緒にのむ?」

「うはは」

それでは、と一口。

「ん」

「んふ?」

「んお?」

「どしたん?」

「これは、炭酸じゃね?」

「あはは」

「あ、ちよつとまつたやつはお酒だつ、酒の臭いがする、てかお父

さんの臭いがするッ…」「えへえ

「すっげ、口の中がお父さんだ！」「

なにやつてんだよ、みたいな視線でみんなが「」たちを見て。私は見んな見んなつて恥ずかしがつて。

なんだかてんこちゃんの顔が真っ赤になつて。

姉さんが本城に人生相談してもらつて。

そんな感じでなんか、青春会議はうまくこつていたような気がした。

なんだ、結構樂しいじゃん。

「で、何で俺も「」にいるんだ」「

「よお、みそつかす」「

「よつ」

「まあ、イイじやん、私も「」の苦手だったんだけど、何か思つたよりおもしろがつてるみたい」「

「誰がよ」

「私が

「ああ、そつすか」

ふと彼の手を見ると握られているのは缶ビールだつたりで、顔も全然赤くなつてない所を見ても、ホント「」つらはと思つ。

「ビール？」

「んだよ、ビール飲んじや悪いかよ」

「いや、お前が飲むことには何ら問題はないが、少しぐれー」「うえー

「いいじやんくれよー」「

「たく、ホントめんぢくさいなア、酔つてると余計にめんぢくセコ」
諦めたのか何なのか、彼は私にビール缶を押しつけてぽりぽりと頭をかく。

「飲みたきや 飲めよ

「おう」

「だつ ケド なあ」

「何?」

「流石 姉妹 だな」

「うつさい なあ」

しかしまあ ビール つてのは 美味しくない。

私は顔をしかめお前こんなモノ飲んでンのかと、こちらに目を向けるが。彼はニヤニヤと笑いながらこっちを見ていて、すっかりと乗せられていたことに気づき缶を突き返した。

「ちーくしょ、ハメられたあつ」

「まあ、飲み慣れてないとキツいかもなー」

「飲み慣れるなよお前はよおー」

「そう言つお前はまた随分酔つてんな」

言われてみるとそعدだと思つ、凄くふりふりして、いつの間にか足下はおぼつかなく。

「ダイジヨブか?」

「うえへへ」

「ちょっと、おい、倒れるなよな」

「だいじょおぶ」

「あー、ひつち、座つとけ、アルコールだナジやなぐヒューロン」と

かも飲めよ

「あ、うん……」

「……何?」

「あ、いやあ別にー、ただ、あんたつて意外と優しいんだなって」

「別に」

「照れてる?」

「別にー」

「そつか、まあいいや」

何かチョット、私の中に暖かいモノが広がる。

アイツは至つてクールだけど、心なしか顔が赤くなつてゐる気がした。

私はイスに腰掛けて、チヨビチヨビとおつまみをつまみながらみんなのことを眺めていた。

フワフワしてて、なんだかあんまり覚えていないのだけど、ソレはソレなりに幸せで。

ソレはソレなりに充ち満ちていたように覚えている。

私の中で、どこかに潜んでいた“みんなで騒ぐ”「コトへの抵抗感。ソレは何だつたのかとゆっくりとたどつてみた。

答えの出るモノではないのかかもしれないのだけど。

私は何か、怖かつたのかもしない。

みんなで楽しく過ごすことが普通な「コトになっちゃうのが。

楽しみが当然のようになつてしまつ、という意味ではないと思う。ソレは私たちにはもっと何か凄いモノが待つていて、お酒や、カラオケとかソンな既存の娯楽にはとらわれないような、何か凄いモノがあるんじやないかって。

私たちだけの楽しみのような、私たちだけが紡げる何かがこの世界にはあるんじやないかって思つていて。

他の人たちと同じように楽しむことに、何か、すんなりとは通らない何かが邪魔をしていたのかもしない。

今時の若者、みたいな括りが怖かつたのかもしれない。

まだ私にとつての私は特別なんです。

普通の人間じゃなくて、ハルカワコウメという特別な私なんです。お酒を飲んではしゃいでいるような、ソンな連中とは違うんです。私の人生なんだもの、それぐらい、イイじやないですか。

「ただいまー」

「あんれ、父さん?」

「おー、なんだ賑やかだなあ、桜もいるのか
んー、ちょっとね、父さんも飲む?」

「未成年に飲ませちゃダメだうー、故に一本ちょうどい、パパが
処分しておひづり」

「はーい」

命の水を得た父は、にたにたと笑いながらひびくとしゃってきた。
私の隣にじつかりと座って、いつも通りに缶ビールのフルタブを
引っ張った。

「おー、真っ赤だな飲んだ?」

「うん

「どうだ

「きもちっす

「そりや良かつた、まあ、アルコールは適度にね」

「ん、ごめん

「なにが?」

父は笑いながら私の顔にビールの缶をあてた。

「やは、未成年なのに飲酒して、あー、つめたい
「ああ、まあ、まあ、小梅は細かいからな」

「何ですか」

「やあ、小梅のそういう口だけは母さん似だなあつと思つて

「へえ……」

「母さんは酒も弱いんだよな、見たところ小梅もそんな感じだけど
「うん、かなあ、チューハイ一杯でふらふらする

「だはは」

くいつとビールを喉へ流し、手元で缶を回しながら父はぼそりぼ

そり、言葉を選んで並べていくように話しだした。

「母さんはさあ、飲めないけどさ、飲み会とか、そういうの積極的

に参加するヤツなんだよね

「そ、うなんだ、確か大学同じだつたんだよね」

「んー、まあ別に当時はソコまで親しかったわけでもないけど、それでさ、でもさあ、アイツは参加するつて言うか、呼ばれることが多かつたらしいんだよね」

「へえ」

「桃子さんと飲んでると樂しいつてさ、よく言われてたらしこよ」

「ソンなことを言う父の顔は、なんだか少しだけ誇らしげだった。何かイイねそういうのつて」

「うん、アイツは酒は飲めないけど、酒の飲み方は上手いっんだて、そう言つてた。小梅もそんな女になればいいさ」

「なれるかな？」

「そりや解らん」

「えー」

「なりたきや頑張らねばね」

「お、おついー」

母は、きつときくにとつて特別な人だつたのだろう。

それは、一緒に飲んでいて楽しいと言つた人達にとつても、モチロン父にとつても。

私も、ソンな人間になれるかな。

自分に對してだけではない、他の誰かにとつてのかけがえのない誰かに。

「おー、みんな飲んでるかー？」

「小梅こそ飲んでるのー？」

「うえへへ」

私にもきつといつか、今時の若者みたいな、ソンなくくりの中で楽しく過ごす日々が来るのかもしない。

そんな時はもう特別な私とか、他にはない私だけなんてモノはどうでも良くなってしまうのかもしれない。

べつに、今時のソレであることが、特別な私である」とと直接結

びついてこるというわけでもないのだけれど。

かといって全くかけ離れているというわけでもないような、そんな気がしている。

私の中には、お前達とは違うんだという、意地汚い根性がいまだ居座っていて離れようとはしない。

だけど、この青春会議がその壁を若干ながら崩してくれたような、ソソンな気がしている。

それが良いことか悪いことか、その判断こそつかないけれど。

きっと今は幸せで、きっと今は暖かい。

私をかわいそうなヤツと笑うなら、ソレはきっと正しいのだろう。だけど私は捨てられない、大切でかけがえのない特別な小梅ちゃんを。

ハルカワコウメイ

舞台の上には一人の女の子がいて、その一人はおとなしく内向的な女の子であり、もう一人は活発で男勝りな女の子。だけどその二人は本来の姿ではなく、言つてみればおれがあいつであいつがおれで状態にある……。

それがこの演劇のお題目だそうで、使い古された設定ではあるモノのそれを劇としてみると「うことは今までにない経験だった。

後ろ向きな女の子を演じるまおは一転して勝ち氣で粗暴な性格に。前向きな女の子を演じていたてんこちゃんは一瞬の間に引っ込み思案でしょぼしょぼな性格に。

初めのうちこそ演劇だと理解しているのだけれど、話が進むにつれて私はその世界に引き込まれていき、いつの間にかまるで本当にその一人が入れ替わってしまったかのような錯覚すら起こしてしまう。私は2人の持っているそんな能力に驚かされ、そしてまた自身のヒトのとらえ方自体が、こんなにも朧気である「ト」に驚かされた。「コレは劇ですって言われなかつたら本当に人をだませるような力だから。そしてそれをこの一人は持つている。ソレって凄いな、なんて素直に感動していた私がまだそこにはいた。

「ちょっとお前、なんだソレ!」

「何がだよ急に」

「や、凄かったです。ハイ、てんこちゃんもー」

「あ、どもですー」

「あなたに言わると何か素直に受け取れない自分がいるなあ

「あはは」

「ソレ、ナチュラルに傷つきますよ」

演劇が終わり舞台裏へと駆け込んだ私の前に、彼女たちは舞台の

余韻すら残したまま現れた。一瞬どっちがどっちか解らなくなりながらも、その興奮に勢いづいて彼女たちへと飛び込んでいく私。

「まあ、アリガト」

「うん、んー、あー、なんかまた今度演劇あつたら見に行くよ、かあ、なんて言つかさ、アレ私の友達！ つて血變したくなりそつー」「なんや照れるなあ」

「照れるけど、それは実行には移さないで欲しいなあ……」

「うえへへ、やらねえよやらねえよ。えつとー、2人はこの後何か用事ある？ まだ劇とかやるの？」

「うん、いや、とりあえずは今日の所はもうないねー、まだ明日はあるけど、んふー文化祭見て回る？」「

「見たい、見て回りたい」

「んあー、じめんなあー、アタシはさあ、ちよつけこの後用事があるんよ」

「あ、昔の友達とか来てるの？」

「いや、何というか、ちょっとね……父さんの会社の関係でね、あんまり言つひやいけんのだやど」

「あはは、そか、なり言つひな言つな」

「ん、何？」

「やや、まあちょっと家庭の事情」

「ふーん、家庭ねえ、あーじゃあまとうあえず。また明日ー……つてコトで良いの？」

「そういう感じで、ホンマゴメンねー」

そんな感じで私たちはてんこぢゃんと別れた。本当はてんこぢゃんとも一緒に良かったのだけど、ソレはソレはコレはコレ。他のクラスのメンツと行くことはあっても、まあ2人だけで文化祭を見るというのは実は初めてのことであった。

周囲を気にせずいつも通りに振る舞えるよつで、なんだか少しワクワクしてしまつ。一般的の来場者もあり、いつもとは違う活気に校内は沸き立つていて、ソレは私のお祭り気分を数倍に盛り上げてくれ

れていった。

「よーし、食つべー。」

「やつぱそこなのか」

「だあーつて良いじゃ ないつかつ、去年はクラスのみんな付き合つてたらゼンゼン食べられなかつたし」

「や、別にダメとは言わんけど」

「じゃあ決定だ、綾校食べ歩きツアーの開始ですー。」

「元氣だなあ」

「元氣！」

「何ソレ」

文化祭案内のガイドマップは紙の節約と言つ名目もあってその一部をデータ形式で配信している。私は高校のホームページからそのデータを引っ張り出し、コントラクトの端っこに表示させていた。単なる文化祭の割には検索機能なんかついてたりして、凝つてるなあ、となんだか唸らせられてしまう。

いつたい誰が作ったのかとも思つナビ、最近はテンプレートがそろつてるみたいで高度に見える「トモ実は結構簡単な仕掛けがあつたりするモノみたい。

「前から思つけど、あんたよくコントラクトでインターネット出来るよねー。」

「ん、まおは出来ないの？」

「なんて言つが、視線操作が未だに慣れなくてや、目が回つてくる」

「あはは、まあね人それぞれるあるかも、うまいヒトなんかは指でタイピングするより早く文章書けるとか言つけどね」

「そんな人の目の動きなんて見たかないよ」

「ん、さぞかしキヨロキヨロしてこる」とでしょ

「ぜつてー、怖いな」

「んー」

先ほど出店で買った缶ジュースを飲み干すと近間の「ミニ箱へと投

げつける。ガ「ン」と鋭い音がして、縁にはじかれた缶は的外れの方に向へ飛んでいく。

渋々入れ直しに立ち上がる私。

「ちやー」

「何やつてんだか」

「あー、そういえばやー」

「何?」

「アイツは、あの明智だつて、ほんじたの。舞台出でなかつたよね」

「ああ、アレは、お店の方いるよ、たぶん今も焼きそば焼いてる」

「へえ」

「何か人気あるのよアイツ、可愛いからかね」

「中身そうでもないけどね」

「うん、知ってるヒトからはよくかきこわれる」

「うはは」

「もうちょい愛想良くすればいいのにな、せつすれば少しはモテるだろう」「元気」

「うんー、まあ、そろかもねえ」

するとちゅうとばかり俯いていたまおはトンでもなことと言いつ出す。

「なあ、ちょっとガールズなトーク氣味だけどや、こい?」

「別に良いけど、何、急に」

「うん、アタシは思うのだけど、明智つてか、あんたのこと好きでない?」

「はあ……はあ?」

「やあ、アイツ結構あまのじゃぐだからや、仮にしてる相手ほどしてことださ」

「そりゃあ嘘だら、なにって、なによ

「いや、あるよー、あるね! ゼットーあるね!」

「何かやっぱー、急に顔がほてってきてこる気がする。」

良くなは解らないけど、そういうのってアリなのだろうか。

「なにやー、真っ赤になっちゃってー、ほれほれ

「つづくな馬鹿、てか触るな」

「ハイハイ、まあー良いけど、ちょっと細つたから重つてみただけだし」

「うんー……」

「……？」

「なー」

「なんでしょ？」

「好きつてさー、どんな感じだろ?」

「ん、え、えー」

「なんて急に言われても困るか」

「んー、あはー」

何だかんだ言つたつて、まあも恋愛歴はゼロに等しい、ハズ。曖昧に笑つて「まかしているけど、明らかに田は泳いでいた。

「何か、あたしらもつと女にならんとなあ」

「いや、はー、同感です」

「まあはせ、好きな人とかいないの?」

「おいらんかもね、おつたかもしれんケド、テレビに向ひとか

「んー、そつか」

「何かせ、好きつて言つのつてせ、なるモンじやなくてせ、気付くモノンとかせ、何かそつロマンシングなモンだと思つてたのよね」

「実際はどうにもですねー」

「まあ、そんなモンですね」

そして私は先ほどから妙な鼓動を続ける胸を押さえる。ああ、何かがおかしいって、自分の中の思いを繰り返し反復してみた。

2・3回頭の中でも同じようなことをつピートしてみて、それでもその違和感は消えず私の中にはいつもとは違つもやもやがこびりついている。これってもしかして、私本当に……。

ふと、そんな考えがよぎった瞬間、携帯の着信音が響きそんな思

考は中斷された。

「あ、メール？」

「ん、みたい……あぎ、29文か」

「あはは、何々」

「開くの？」

「何でよ、開けよ」

「ウイルスとかだったらヤジ嬢」

「別に、ダイジョブでしょ」

「はいはい」

そうして私はその見たことも、会ったこともない送り主からのメールを開く、そこには非常に簡潔な文でたつた一つの忠告が記されていた。

「頭上……に注意してください？」

「何ソレ？」

「さあ……」

そして、ソレと同時に私たちの周りを歩く多くの人々の携帯が次々と鳴り響く。まるで連鎖反応のように広がるソレはちょっとした着信メロディーによる不協和音を生み出した。

内容こそ解らないが、おそらくはこの文面と同じモノ。

この場にいる全ての人々へ、この29文は送りつけられてくるのかもしれない。

「おお、マジか」

「凄いね、こんなコトあるんだ……どうする？」

「うん、どうしようか、と言うかどうかすることなのかな？」

「んふふ、なんとも……つて、あれ」

ソコで私はふと、チョットした疑問を抱く。

「何……あつ……」

「まあに、来ないね」

「え、あ、そうだね、おかしいね」

「ハブかれた？」

「あはは、ちょっと複雑な気分だな」

校内放送が鳴り響き、数人の先生が呼び出されている。何かしらの説明があるかも知れないと、その場で待っていた私たちだつたがそれらしい何かもないままに5分、10分と時間は刻々と過ぎてき、時刻は既に夕暮れ近づく。

秋の夕暮れは少し肌寒く感じる、私は上着のボタンをとめて澄んだ赤さを持つ空を見上げた。

別段何が降つてくると言つわけでもなく、空はいつも通りに広がつている。

「何でもない感じ?」「

「みたいだけね……」

「少し、涼しくなつてきたね」

「そろそろ教室戻ろうか」

「あ、うん……」

「テレビとか、出たりするかな」

「ローカルだつたら行けるかもね」

「ソレはソレで楽しみ」

「うはは……」

校庭側へと周り、最後に一通りお店を見ながら校舎の正面へと周る。学生や来場者も既にさつきのコトなど気にする素振りもなく、祭りは佳境に向けて最後の盛り上がりを見せていた。

皆が忘れた頃になつてはじめて思い出したように校内のチャイムが鳴る。

「あ、来たね」

「ん、柳先生かな?」

「えー先ほどの迷惑メールの一斉送信の件についてですが……えーと、おそらくは本校に対する悪戯、嫌がらせのたぐいと思われます。えー……『来場の方々には大変不快な思いをさせてしましましたこと、お詫び申し上げます。念のため屋上近辺などに危険物がないかを教職員と警備員にて調べましたが問題はありませんでしたのでご

安心ぐださい」「

「だつてさ」

「うん……」

「まあ、そんなモノかね」

「あはは、まあ、こんなモンですね」

事件なんて起こらない方が良いのだけれど、ちよつとばかり何かを期待していた私は何処か期待を裏切られたような気がしてしまつ。繰り返される放送を耳に素通りさせて、私は再び空を見上げる。

「まあー」

「なーんじゅ」

「落ちてくるならさ、何が良い?」「

「あー、えへー、なんかなあー」

「隕石とか」

「うはは、まあ、みんな一緒に吹っ飛んじゃうならそれはそれでも良いかな」

「あ、彼氏とか」

「そやね、天からのプレゼントならありがたく貰おう、なんだかそんなんのもつ昔の話だなー」

「うふふ」

校庭から見上げる空は高い、雲が何層にも広がっていて、端の方から日に向かつてゆつくつと青みがかつていいくグラデーションが何とも綺麗だった。夏の夕焼けと比べると、秋のソレは悲しくて、寂しいモノに感じる。夏のソレが広がる夕日なら、秋のソレは突き刺す夕日。澄んだ空氣と、心地よい秋風がそんな雰囲気を作り出していた。

来場者の人気も徐々にまばらになり、後片付けを始める生徒達の声が祭りの残り香のようににちよつとした名残惜しさのようなモノをくれる。

まあ、とはいえたが明日も文化祭は続くし、明日もまた夕日は沈んでいくのだろう。

私は腕を組んで背筋を伸ばし、そうしてちょっと細く長いため息をついた。

「…………あれ」

「どしたの？」

「まあ、何あれ」

「何って何？」

「屋上！ あれ……ッ！」

私は反射的に校舎へと走り出す。

「ちょっと待つて！」

私の声を聞いて屋上を見たのか、周囲が少しづわめいた。

「や、嘘……」

とんだ。

誰かなんて解らない、フェンスをよじ登つて一人の女生徒が屋上から飛び降りた。周囲から訳のわからない悲鳴が響き、それは場の混乱と混じり合つて校庭を埋め尽くす。

私が見上げると、そいつが落ちてきて。それは私に当たることはなく、私の目の前に落ちた。

ゴゾ、と鈍い音がして一瞬だけビクリと動いた彼女はそれ以降動かない。

私は身体の中からこみ上げてくる何かを飲み込み、しばしその場に立ちつくす。

それ以外、何もすることなんて出来なかつた。

「こうめ、下がつてっ！」

意識の遠のいていた私はまあの声で反射的に校舎から離れる。何事かと空を見上げればまた二つの人影がフェンスを飛び越えた。

「ひうつ」

再び大きな悲鳴が周囲からこだまして、私も訳のわからない声を上げて、そしてまたソレを見ていくことしかできない。

飛び降りた一人は何かを叫びながら空を舞い。

緩い放物線を描いて地面へと落ちた。

「なになに！？ 小梅、ダイジョブ？ ケガしていない？」

「え……あ、あうん」

一人目が胸から地面に落ち、苦しそうに笑いながら、ふ、と血を吐いた。

もう一人は足から落ち腕で地面を這いながら一人目の所へ行き、何事かを耳元で呟いている。

「あ、あ……」

「小梅？」

「屋上、行かないと、まだ人いるかも！」

「え、あ、待てッてば」

私はまおを振り切つて校舎へと駆け込み土足のまま階段を駆け上がる。

階段を上っている間、また外から悲鳴が聞こえた。

「屋上、ってドコだ！？」

最上階を右往左往しながら私は天井の上からする罵声に気付く。喧嘩といつか、なにかを止めようとするような悲痛な叫び、もう既に誰かが屋上へと上がってるのかも知れない。

ソレが余計に私を焦らせ、胸の中だけではなく、体中がごちゃごちゃになつたように何も訳がわからなくなつた。

「あつた、階段！」

校舎端の非常階段が屋上へ続いている。

開けられたままの扉が誰かが駆け込んでいったコトを教えてくれる。

「先生え！」

駆け上がった屋上では数人の男子生徒と教師達が飛び降りんとする生徒達を止めていた。

説明出来る光景ではなく私はうろたえたままにその場に立ち竦む。

「小梅！ そいつを！」

教師の一人が私の名を呼び、フェンスに手をかけている一人の生徒を指さす。

「私が！？」

「いいから！」

怖くって、怖くって、足が震えた。

その男子生徒へと駆け寄つて身体を押さえつけるのだけれど、彼の力であつという間に引き剥がされて私はコンクリートの床に投げ出される。

「だッ……！ やつ、めなよ！」

私は叫ぶけれど、彼は聞く耳も持たず。

そうしてそのまま私の視界からいなくなつた。

「うお！ らあ！ ダイーブ！」

彼の顔は笑つていて、それはきっと、この選択が苦しみによつて選ばれたモノではないことを物語つているのだと思う。

彼らの死に、そしてこの場所になかったモノ、ソレは誠意だったんじゃないかと、私は思った。

あの日の夕日、血のような赤に染まつた学校の景色。たぶん死ぬまで、私は忘れるコトはないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8287e/>

今を生きるわたしを生きる私

2010年10月20日18時18分発行